

横浜市市民活動支援センター自主事業

2015-2017

コミュニティカフェ

カフェ型中間支援機能の
創出・強化・普及

Report

横浜コミュニティカフェ
ネットワーク



横浜市
市民局

平成 27 (2015) 年度～平成 29 (2017) 年度

横浜市市民活動支援センター自主事業報告書

もくじ

団体紹介	3
事業紹介	4
事業 1：公開フォーラム	8
事業 2：事例検討会	11
事業 3：訪問調査	14
事業 4：アンケート	16
事業 5：伴走会議	20
コラム	32
コミュニティカフェ紹介	36
参考：中間報告書	46

「カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及」 報告書について

この冊子は、横浜コミュニティカフェネットワークが2015(H27)年度～2017(H29)年度の3か年で計画している「カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及」事業の報告書です。

本事業は、横浜市市民局の協働事業である、横浜市市民活動支援センター自主事業として取組みを行いました。

YCCN について

団体紹介～横浜コミュニティカフェネットワーク (YCCN)

ねらい

コミュニティカフェ運営者同士のつながりのきっかけづくりや、関係を深めることなど、地域課題解決に取り組むための、地域との関係づくりを行う中間支援機能を高めるためのノウハウを可視化し、共有する学び合いや相互支援を目指します。

活動・事業

- 交流事業
コミュニティカフェ運営者同士のつながりのきっかけづくりや、関係を深めるために、交流会やメーリングリストの設置、フォーラム等の開催を行います。
- 学び事業
コミュニティカフェの運営や中間支援機能を高めるためのノウハウを可視化し、共有する学び合いや支援事業を行います。
- 情報発信
コミュニティカフェの啓発や情報共有を行います。

2015(H27) 年度からは、横浜市市民活動支援センター自主事業として、カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及に取り組んでいます。

<http://yokohama-ccn.jimdo.com/>

本事業の背景について

・市内各区では、区民活動支援センター・区社会福祉協議会・地区センター・地域ケアプラザ・コミュニティハウスなどの施設が、団体や住民の活動拠点となっている。

・この10年ほどの間にコミュニティカフェという新たなスタイルの地域拠点が市内に次々と生まれている。飲食を伴わないカフェ的な場も含め、形態も交流型・テーマ型・事業型等、多様多種だ。

・「目的を持たなくても利用できる」カフェは敷居が低く多様な利用者に、居場所や情報、地域での役割（出番）も提供している。また、団体の運営支援やネットワークづくり、連携のコーディネート等、中間支援機能を果たす要素を内在している。

・市内に早期に開設されたカフェでは、エリアマネジメント、ネットワークづくり、団体運営相談等、すでに中間支援の役割を果たし始めている。この数年は横浜市まち普請事業を活用し地域づくりを意識して開設するカフェ等も増えて、そうした中間支援志向のカフェに、支援機能の強化ニーズが出てきている。

このような社会的背景及び課題意識をもって、本事業を開始し推進してきた。

上記背景に加え、本事業の中では更に歴史的背景や現社会でコミュニティカフェが果たす意義を深めた。

『2016 Report P.35 名和田是彦（法政大学法学部教授）コラム内、コミュニティ・カフェの歴史的意義～より開かれた「公共の場」を目指して』より要約

.....
(1) 既存の施設に足りない「目的なく足を運べる」要素

既存の施設（集会施設やコミュニティセンター等）も近年は交流的オープンスペースをもちながら、生涯学習支援機能や地域課題解決機能の双方を重視した施設になりつつある。このように既存施設において地域のつながりを重視した取り組みが広がっているものの、それでもなおコミュニティカフェが必要とされ、また、つくられているのは、既存の集会施設にはやはり用事のある人、目的意識を持った人しか行かないという限界があるためであろう。すでに仲間になった人たちが、その仲間の力によって何かを成し遂げようとするために使う施設である。

カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及事業について

こんな事業を実施しました！

横浜コミュニティカフェネットワークでは、コミュニティカフェが持つ中間支援力について気づき発見し、その力をさらに高め、そして広く地域社会に普及するために3か年で以下の事業を実施しました。事業は大きく分けて個別のコミュニティカフェの中間支援力を強化する事業と、当ネットワーク自身の

支援力を強化する事業に分けて考えました。またこれらの事業（支援）は専門家等にすべて依頼するのではなく、多くは、実際にコミュニティカフェを運営している実践者が担うことで、ノウハウや価値を共有しあい、相互支援力を高めることで大きな成果を生むことができました。

事業1：訪問調査

2年間で合計9か所のコミュニティカフェと3か所の区民活動支援センターを訪問して調査

事業2：アンケート調査

3年目に市内のコミュニティカフェ 64 箇所を対象に実態を調査

事業3：事例検討会

2年間で合計7回にわたって、実践者、研究者等でカフェ型中間支援について検討

事業4：伴走会議と地域フォーラム

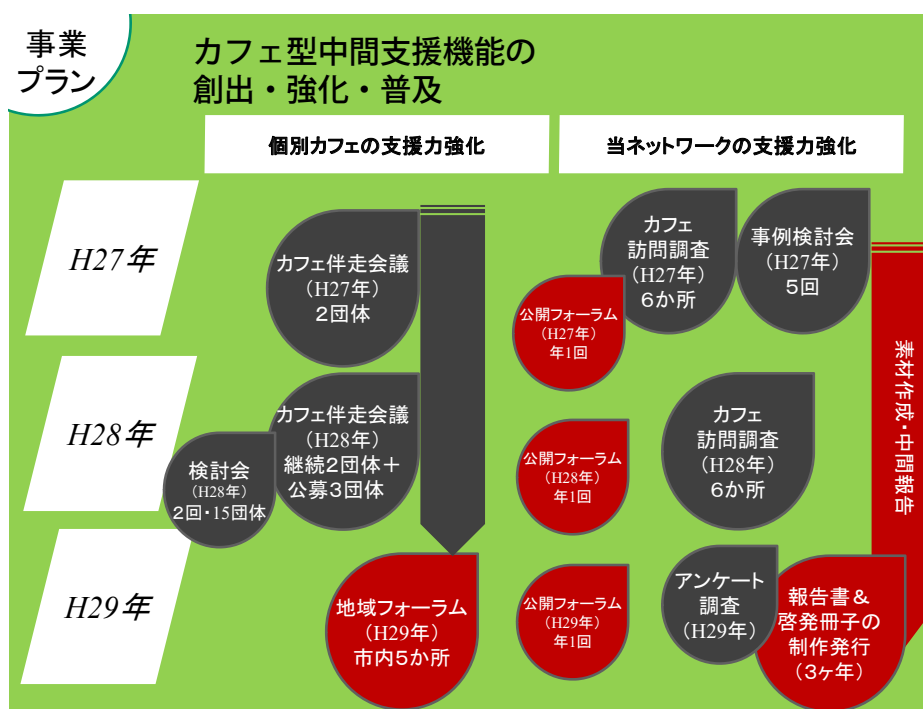
5か所のコミュニティカフェに伴走して支援力強化を図るとともに地域でフォーラム開催

事業5：公開フォーラム

実践者や行政・支援機関職員と本事業の成果を共有し学ぶ機会を3回開催

事業6：報告書・啓発冊子の発行

3回の報告書発行を行うとともに、今後普及させるための啓発冊子を発行



本事業で分かったこと

3年間事業で見えてきたこと

3年間の事業を通して見えてきたポイントを以下の通り整理をした。

1. 多様性とゆるさをベースにしたボトムアップ型の場づくりが生む中間支援機能
2. 間口の広さや敷居の低さが生むつながりが市民意識を育て、まちの担い手を生む
3. カフェ型中間支援機能を自覚し、カフェ同士で対話する中で力量が形成される
4. コミュニティカフェが果たしている役割の意義・成果の可視化が重要

1. 多様性とゆるさをベースにしたボトムアップ型の場づくりが生む中間支援機能

コミュニティカフェは、各組織の成り立ち、地域特性やニーズ等、様々な要因によって、交流型やテーマ型、事業型など、多様な形態がある。カフェの在り方は、経営者がトップダウンで決めるのではなく、関わる人が日々持ち込む話や対話から作り上げられる。こうした「ゆるさ」を大事にしたボトムアップ型の場づくりが、カフェ型中間支援機能を、自然発生させている。そのため、本事業では「すべてのコミュニティカフェが、カフェ型中間支援機能を果たすことを求めるものではない」ことを確認した。

2. 間口の広さや敷居の低さが生むつながりが市民意識を育て、まちの担い手を生む

カフェという形態は、様々な人が足を運びやすい。ある程度ターゲットやテーマ性をもっていても、多くの市民が気軽に集える場となっている。また、コミュニティカフェという特性上、人がつながりやすく、人の出会いや対話をベースに、スタッフやボランティアが自分にできることを考え出し合ったり、情報を集めたり、地域のために何ができるかカフェの運営を通して考える機会が、市民意識を育て、各人が持つ力を再認識したり育てることもつながっている。

3. カフェ型中間支援機能を自覚し、カフェ同士で対話する中で力量が形成される

中間支援機能を果たしているカフェの多くは、本事業当初はその機能を自覚していなかった。事例を出し合い整理していった結果、自カフェの果たしている役割に気付いた。多様なスタイルのカフェが混在するなかでも、「カフェ型中間支援」の共通したイメージを持つことができた。各カフェの関係者が、中間支援機能を自覚したことによって、コミュニティカフェの価値を再認識し、力量向上への意欲が生まれた。丁寧に意見を出し合った「カフェ型中間支援に必要な要素」は、まとめた結果よりも、話し合うプロセスの中に、力量向上につながる得るものが多かった。

4. コミュニティカフェが果たしている役割の意義・成果の可視化が重要

カフェは中間支援機能を目的とする場ではないために、どこまで相談にのるべきか範囲を定めにくく、対内対外的にも評価しにくい。金銭的収入を生まない中間支援機能が、事業（飲食提供や物販等）に割く時間や人などの資源がトレードオフになることなど、カフェ運営者は悩みを感じ始めている。アンケートでは果たしている役割を止めたいと回答したカフェもあり、カフェ型中間支援機能が継続するには、対外（行政や地域の多様なステークホルダーなど）のみならず組織内においても、果たしている役割の価値が見える化する必要があり、成果の可視化が重要であることが分かった。カフェは、説明責任として、来店者数やボランティア数や時間数以外の果たしている役割を表現し、継続のための多様な資源を生み出すことが不可欠であるということがわかった。

公開 フォーラム

毎年度の終わりに公開フォーラムを開催し、検討し見えてきたことを発信すると同時に、広く議論の場をつくった。

■ 2015 年度公開フォーラム

第 1 部の事業報告に続き、第 2 部は「みんなで語ろう、コミュニティカフェの価値」としてパネルディスカッションが開催された。

その中で、中間支援機能についての概要や、コミュニティカフェの価値の指標、区民活動支援センター、行政など他の団体との連携の仕方などについて会場を巻き込んで議論が交わされた。

その中で、情報開示をして透明性を出し、やってきたことの再確認をしている、マンネリ化しやすいが新たな思いを確認できた、「価値を可視化する」難しいことだと思う。変容というキーワードを重視していきたいといった現状の確認や今後に向けての意見交換がなされた。

■テーマ：コミュニティがまちを育てる!? “カフェ型中間支援組織”ってなに？

■開催日：2016 年 2 月 14 日（日）

■場所：シェアリーカフェ

■参加者：65 人



■ 2016 年度公開フォーラム

・事例検討会を経て、2016 年度末に実施した公開フォーラムにおいては、キャッシュポイントのない中間支援機能をどう継続していくのかについて議論がなされた。

・中間支援機能を担うために、公的支援が入ることや、民間支援（協賛や寄付等）によって支える等、カフェによってさまざまな選択肢があり得ることが整理された。

・公的支援が入ることの意義としては、目的／意識化していない人にリーチできる価値や無関心層の掘り起こし機能等があげられた。

・また、その検討や実施をカフェ単体ではなく、様々な連携の中で実施することの重要性も確認した。中でも、区民活動支援センターとの連携を深めることが大事であることや、区民活動支援センターのブランチャ化が尚必要であるということも提案としてあげられた。

■テーマ：コミュニティカフェの価値とは？

～カフェ型中間支援機能について深めよう～

■開催日：2017 年 2 月 12 日（日）

■場所：フラットステーション・とつか

■参加者：60 人



■ 2017 年度公開フォーラム

最終年度の総括となるフォーラムでは、基調講演に、カフェ訪問で訪ねた行政事業の地域交流拠点「芝の家」の企画運営に関わっている坂倉杏介氏を招いた。



- テーマ：コミュニティカフェがその価値を発揮するために
～カフェ型中間支援機能の可能性
- 日 時：2018年1月19日（金）13時半～16時半
- 場 所：BankART kawamata Hall（横浜市中区）
- 参加者：93人



■ 講演

「地域交流拠点の持つ可能性と運営の工夫」
東京都市大学 坂倉杏介氏

坂倉氏はコミュニティマネジメントを研究し、実際に場を作って地域の人と関わって活動を進めている。これからのまちづくりは、何をしていくのかを話し合っ決めていかなければならないので人との信頼関係づくりが大切だと考える。

東京都港区で、行政事業として地域交流拠点「芝の家」を民間運営している。芝の家は横浜のコミュニティカフェの活動を参考にしてきた。港区は昼間人口が多く、単身人口、外国人が多いことが特徴である。芝の家には一日平均40名程度が訪れ、多世代交流が広がっている。1日5時間のオープンの中で訪れる人たちは芝の家に来ることが生活リズムの一部となっており、人々の暮らしの中に溶け込まれている。芝の家では、やりたいことを思いついたら基本的にすぐやることを大切にしている。その日に

できることはその日のうち、という考え方が「できる」という雰囲気生まれ、来た人が関わることができる。

場づくりの基本は人であり、カフェは居場所でもあり活動拠点でもある。連携し、コミュニティが作られることによってカフェが形成されていく。

■ パネルトーク

坂倉杏介氏（東京都市大学都市生活学部准教授）
齊藤保（横浜コミュニティカフェネットワーク代表・港南台タウンカフェ）
コーディネーター：米田佐知子（横浜コミュニティカフェネットワーク世話人）

○コミュニティカフェが担っていく「公共」とは？
坂倉「実践の中で、人と人が関わる空間や振る舞いなどの空気が公共であると感じる。知らない人が入ってきても受け入れられる空気感。そういう空気

感を得られた人は次のステップへつなげることができると思う。」

齊藤「まちの中にタウンカフェがいかにはみ出せるか、パブリックゾーンのカフェであることを意識している。公共を担っていると周りが認めてくれるまで10年を要した。」



○どこまで公的な存在であるとするか？

坂倉「利用者に対して、役所的な雰囲気を出したくない、という課題(命題?)が存在した。委託事業ではあったが、行政とはフラットな関係を築けてきたと思う。初期は、信頼関係がなく意見がぶつかることもあったが、話し合いを重ねて共通言語をつくってきた。」

齊藤「行政と団体は、協働であっても契約者の甲と乙の関係になりやすい。第三者のコーディネーターが加わるのが大切だと思うが？」

坂倉「大学の事業としてやるので、できることとできないことは割り切って伝えないといけないと感じた。実験事業でもあり、大学は事業評価の専門家として関わられたのもよかった。」

齊藤「タウンカフェではランチ事業開始の際情報発信のために役所的なスチールのチラシラックを置くように言われた経緯がある。行政との折り合いが難しいと感じたが、第三者を交えた研究会勉強会を重ねた行ったことで共通の認識が生まれるようになったので、第三者の存在は重要だと思う。」

坂倉「話し合いを何度も行った。公共施設だから通常は飲酒NGだが、お酒を出す場合のガイドライン



など、区の事業として意味合いや、どうすればよいかを話し合う必要があった。ものすごい時間と話し合いの末に折り合いがついた経験もある。」

米田「納得するまで、どのくらいの時間を要したか？」

坂倉「3~4年経つと落ち着きどころがわかってくる。スタッフ同士の業務事項の共有もたくさん時間を設けた。」

米田「単年度では、形にならないということ。」

齊藤「コミュニティカフェの価値を地域の方や行政へ情報提供する必要があると思う。」

米田「公共を担う説明責任を、どう表していくか？」

坂倉「数字で出せるものは出す。やったことはすべて報告書にまとめて出す。そうすることで活動の内容がわかる。アウトプットを量的(売上や来場者など)だけで図る評価指標には疑問を感じている。大事なことは、スタッフ同士の交流が広まった、来場者の行動が変化したなど、活動の結果、何が起こったのかというアウトカムである。ロジックモデルを整理して何が起こったかということに関わったスタッフみんなで考えるべきである。現在、質的対話型の評価の手法を研究している。」

○今後の展望は？

坂倉「次の新しい政策をフォーマルでなくオープンに考える場、地域の課題解決のデザインをする場所を作りたい。まちづくりの作法でなく、人の幸せをベースにした具体的な場所づくりをしたい」

齊藤「カフェという場を活用した民設民営の場で、カフェのメニューにないスタッフのおせっかいなどの見えない価値をだれが負担するのか考えたい。それぞれのカフェの成功談を共有し、解決策を組織全体で学び合う場を作りたい。」



事例検討会

事例検討会は既に中間支援機能を果たすコミュニティカフェの事例から、カフェが中間支援役割を果たす意義や、カフェの支援機能充実のために必要な要素を検討整理する目的で開催し、カフェ運営経営者や学識者、市職員 28 名が参加した

■ 2015 年度：価値の可視化が必要！

・2015 年に事例検討会を実施し、コミュニティカフェの中間支援機能に期待される要素を整理した（表 1 参照）。その際に、「評価指標がなく意義や成果の可視化が難しい。参加人数、売り上げでない評価指標の必要性を感じる。」「相談者は『支援してもらった』意識がないため、評価しづらい」といった課題が浮き彫りになった。また、「カフェの認知、カフェに対する信頼、地域参加率等の数値化」「他者のために行動することが自分にとって楽しいと思うと思った人がどれだけ増えたか調査」等コミュニティカフェオーナーならではの視点での、価値可視化のアイデアも多数出てきた。（2015ReportP.14）

表 1：コミュニティカフェの中間支援機能に期待される要素

【カフェ型中間支援機能に期待される要素】		20151129YCCN			
カフェ名称:					
①理想→あなたのカフェにとって、各要素の重要度を1～4で記入ください(4が一番重要度が高い)					
②現実→あなたのカフェが現在有していると思われる力量度を自己診断して1～4で記入ください					
		初期	現実	理想	
空間・場づくり	1 誰でも入りやすい場・歓迎する人が、日常的にあること				
	2 お客さん同士が、いつも話しやすく、つながりやすい雰囲気になっている				
	3 ゆるやかな場づくり、誰ともつながらないことも受け入れられる				
スタッフの意識や力量	4 お客さんのニーズ（抱えている課題・期待）の見極め				
	5 お客さんやボランティアが持っているスキルや能力などを引き出す（エンパワメント）				
	6 聴くこと共感すること、一緒に困る・考える、学び知ろうとする姿勢				
	7 支援する・されるという関係性を固定しない（お互いさまの関係づくり）				
	8 コーディネイト（人と人をつなぐ、異なる相談をつなぐ、他分野への働きかけ）				
	9 カフェスタッフ各自が持っているネットワーク・リソース・関心事の把握				
	10 スタッフ一人一人が持っている、情報、ネットワークを、全体で共有し活用する				
	11 中心スタッフが、地域(テーマ)への思い入れを持っている				
	12 個人の困り事を、みんなの困り事や地域の課題として捉える				
	運営組織の力量	13 カフェスタッフを信頼して任せる、感謝する・評価する			
		14 地域課題を把握していること			
		15 地域課題を先に読んで解決する。半歩先の課題を見つけられるセンス			
16 地域の動きが見える（情報が集まってくる）					
17 まちや社会に必要な仕組み・機能を創出する意識					
18 カフェが持っているテーマからさらに広がりをもととする意識					
19 行政・他団体との連携と協働を志向している					
20 活動蓄積による（地域や他組織からの）信頼					
21 まちづくりや地域課題解決の担い手を見つけ育てる意識					

(2015ReportP.16)

■ 2016 年度：価値の可視化検討会

・2015 年度の「価値の可視化」の必要性を踏まえ、2016 年度において、「価値の可視化検討会」を YCCN 会員（コミュニティカフェの代表者ら）で集まり 2 回開催した。

1 回目は、コミュニティカフェの成り立ちや形態、利用者が重視する価値がそれぞれ異なるものの、共通項目となる評価項目の整理をした。

その結果、

- ①カフェに対する期待：相談件数、視察件数
- ②透明性：数値（収支）、事業報告
- ③共感：ボランティア数（のべ）、ボランティア活動時間数（のべ）、寄付額
- ④自己実現行動：貸しスペース件数または時間数
- ⑤変化：中間支援の結果（事例）

といった 5 つの指標に整理された。

②－④については、対外的な説明に有用であり、①、⑤、⑥は対内対外双方にとって重要な指標であるということを整理した。

2 回目の検討会は、右ページ表 2 のように 5 つのカフェオーナーがこの評価項目に照らし合わせて実施有無、記録有無、資料有無という 3 つの軸で評価実現可能性について整理をした。

表 2：価値の可視化

		実施有無	記録有無	資料有無
カフェに対する期待	相談件数(年間)	5	2	0
	視察件数(年間)	5	4	2
透明性	数値(収支)	5	5	5
	事業報告 (実施時期や方法)	4	4	4
共感	ボランティア数(のべ)	4	4	3
	ボランティア 活動時間数(のべ)	4	4	3
	寄付額	4	4	3
自己実現 行動	貸しスペース件数 または時間数	5	5	3
変化	中間支援の結果(事例)	6) 参照		
上記以外の指標	共通	・利用者数・購入者数・地域の人からの理解(町内会、商店街)・地道な毎日の質的な評価・生み出された事業や活動数・チラシラック活用件数・ランチ事業・事務局機能数・表彰件数・協同事業数・メディア掲載数・ウェブアクセス数・団体NPOの利用件数・ネットワーク(他団体との)・地縁組織や行政とのつながり具合・情報発信量・営業日数・利用の世代等		
	個別	・一般の方の入りやすさ(障がいの方用の施設と 思っ入りにくい等ないか)		

・表にある通り、上記以外の必要な指標案として「地域の人からの理解」や「他団体とのネットワーク」「生み出された事業や活動数」等の項目も新たに浮かびあがってきた。また、一つ一つのカフェ特有の事業に照らし合わせた評価項目を立てることの重要性も見えてきた。

・特に「変化」の項目においては、

- ①お客様自身の変化 ②新しいつながり ③地域の方の意識の変化 ④運営者自身の変化 ⑤生み出された地域の機能
⑥地道な日常の評価

という6つのカテゴリーに整理し、丁寧に拾うことの重要性を改めて認識をした。中でも日常的に場を開き続けることへの評価の重要性、また、第三者からの評価の重要性も再認識した。

訪問調査

コミュニティカフェが果たしている中間支援役割を、横浜市内外の事例に確認し学ぶことを目的に 12 か所を訪問した。

■コミュニティカフェ訪問調査報告

コミュニティカフェが果たしている中間支援役割を、横浜市内外の事例に確認し学ぶことを目的に 12 か所を訪問した。初年度は、自治会・町内会が運営するカフェや、民生委員等が月 1 開催するサロンの非常設型カフェも訪問し、運営状況と外部団体とのつながりを確認した。2 年目は、3 か所の区民活動支援センター・区役所地域振興課も訪問対象とし、区域の中間支援機能や施設間連携の現況、同区内のコミュニティカフェに対する認知状況を確認した。

【参考】2015 年 2016 年の訪問調査報告は以下の web サイトでご覧いただけます。
<https://yokohama-ccn.jimdo.com/>

①訪問先（名称や開催日等は訪問時点のもの）

	カフェ名称・訪問先	所在地(区)	運営者	開催日
1	ほっこり	金沢区	湘南八景自治会	週 5 日 10～16 時
2	地域カフェすみれ中町	神奈川区	三ツ沢地区民生委員児童委員協議会	月 1 回 10～12 時
3	ふれあいわかば	旭区	NPO 法人若葉台	週 4 日 10～16 時
4	ほっとさこんやま	旭区	NPO 法人オールさこんやま	週 6 日 9～18 時
5	いのちの木	都筑区	NPO 法人五つのパン	週 5 日 10 時半～17 時
6	こまちカフェ	戸塚区	NPO 法人こまちぶらす	週 6 日 10～17 時
7	コミュニティサロンさくら茶屋	金沢区	NPO 法人さくら茶屋にししば	週 6 日 11～17 時 (土曜は 10 時～)
8	芝の家	東京都港区	三田の家有限責任事業組合	週 5 日 10 時半～17 時
9	ソンベカフェ	鎌倉市	個人	週 4 日 11 時半～20 時 (土曜は～21 時)
10	都筑区民活動センター	都筑区	都筑区	毎日 9～17 時 (第 3 月曜・祝日・年末年始・施設点検日除く)
11	港北区区民活動支援センター	港北区	港北区	週 5 日 8 時 45 分～17 時
12	とつか区民活動センター	戸塚区	NPO 法人くみんネットワークとつか	週 6 日 9 時～21 時 (土日祝日は 17 時)

②市内コミュニティカフェ訪問で把握できたこと

コミュニティカフェで日々の会話や、利用者が持ち込む情報や課題、アイデアから、多様な活動が創出されている現状と、カフェ運営に参加する個人の成長の機会になっていることも確認された。

自治会・町内会や民生委員等が運営するカフェは、高齢者の見守り拠点的役割や住民ニーズの対応窓口として機能していることが確かめられた。地域に必要な仕組みを、社協と連携しながら独自に立ち上げられる基盤と力を持っているため、市民が行う活動等の支援や連携は少ないように見受けられた。

③区民活動支援センター・区役所地域振興課訪問で把握できたことと生まれた変化

18区のうち、「カフェ伴走会議」で関わりのある区と公設民営型の区民活動支援センター（以下、センター）を選び訪問した。どちらも市民活動や生涯学習を始めたい区民や既に活動している区民を対象に運営されているが、センターのハード面や運営体制、方針づくり、施設間連携の進み具合など、区ごとに違いがあった。コミュニティカフェに対しては、センター事業で講座会場として利用、地域情報の収集に活用、「まちづくりの拠点として外せない存在」など、それぞれに認知されセンターから活用されていた。「コミュニティカフェは参加できて「生きがい」「居場所」が提供できるが、センターは中間支援機能で、その役割は担えない」といったコメントも聞いた。都筑区のヒアリング後、都筑区では区内の施設間連携会議にコミュニティカフェも誘われ参加するようになり、センター広報誌でコミュニティカフェが特集されるなど具体的な接点が深まった。

④市外の交流拠点・カフェ訪問で得られたこと

【芝の家（東京都港区・行政事業の交流拠点）】

- ・行政事業の場だが計画してもできないことがある、場で起こることを丁寧に拾っていく。
- ・目的を持たずに過ごせる場所の大切さ
- ・困りごとを直接解決する役割でなく、つなぐ役割。人生の一時期を見守る場。
- ・スタッフの多様性が来場者の多様性を生み出す。
- ・スタッフミーティングでスタッフが自分の日常と芝の家と、意識を切り替える。

【ソンベカフェ（鎌倉市・個人経営のカフェ）】

- ・日常的に集えて、飲食可能で和めることがカフェの価値。
- ・カフェは問題意識を伝える場として利用できる。同じ価値を共有する人が集い情報交換が始まる。
- ・カフェは運営者のポリシー・人生観が明確であることが重要。だが、違うものの境界線であることも大切。多様性を認め寛容であること。
- ・仲間という言葉は仲間でない人をつくる。閉鎖的にならないようにする。
- ・所有から共有へのシフトを重視。最低限のルールだけで、協力しあい助け合う。

アンケート調査

3年目に、それまでの成果に基づき、市内常設のコミュニティカフェへアンケート調査を実施し、カフェ型中間支援機能の実態の量的把握を試みた。アンケート調査項目は、協働事業先である横浜市市民局と YCCN 参加のカフェ運営者が共に検討して設定した

YCCN「カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及」事業 2017 年度報告書関連調査
横浜市内コミュニティカフェアンケート

- 対象：横浜市内の常設コミュニティカフェ 62 か所
- 回答数：46 か所 (回答率 74%)

1 どの年代の利用者が多いか

30代～70代以上までの利用者があるカフェが5割以上。最も多い年代は60代で68%。10代14.6%、20代10.4%。中には、10代～40代中心のカフェもあった。

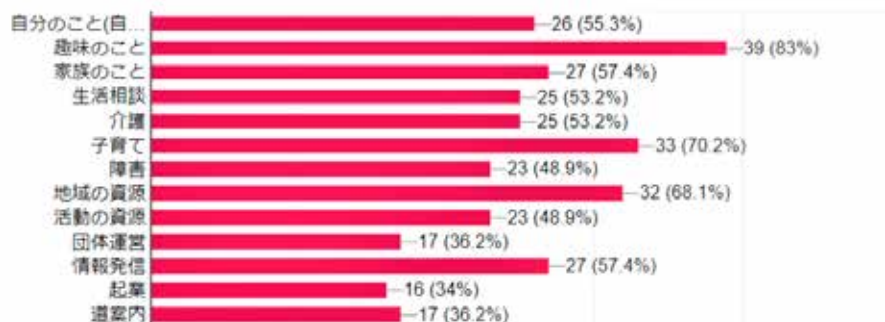
2 カフェ定義との整合性確認

- ①目的なく、誰でも利用できる 95.8%
- ②飲食や物販、スペース貸など金銭のやりとりが可能 91.7%
- ③地域と社会につながる機会が用意されている 95.7%

3 カフェ型中間支援機能の有無確認

(1) 持ち込める力：カフェ利用者が自分の「やりたいこと（イベントの持込企画など）」や「こんなことで困っている」等のおしゃべりや相談が、お客さん同士で行われている
「時々」「ほぼ毎日」を合わせると約98%となり、ほとんどのカフェが持っている力と言える。

(1)- 1 持ち込める力 / どのような内容ですか？ (あるもの全部)



(1)- 2 持ち込める力 / 誰から持ち込まれますか？ (あるもの全部)



(2) 関われる力：カフェの既存活動やイベント事業の企画や運営に関わる機会が用意されている

「カフェ運営にボランティア参加」69%。「イベント企画に単発ボランティア」83.3%「実行委員などの継続ボランティア」52.4%と、高い比率で利用者が企画運営に関わっている。

(3) 情報を提供する力：利用者の状況に応じて使える地域内外の情報を提供している

「地域で行われているイベントや施設の情報」を提供しているカフェは、93.6%あった。

(4) つなげる・引き合わせる力：地域の人や団体同士を引き合わせるなど、ゆるやかなつながりをつくることのある

「月に1回以上」が51.1%。「年に数回」40.4%で、9割以上が、人や団体をつないでいる。

(5) 地域づくりの対話を生み・社会に発信する力：暮らし・地域や社会の抱える課題について考えるフォーラムや勉強会を、周囲に呼びかけて開催することがある

「やっている」60%、「これからやりたい」23% 「やっていない」15% 「やっているがやめたい」というカフェも1件あった。

4 カフェ型中間支援機能は、必要と考えますか？（現在やっているかは問わず）

「はい」88% 「一部は必要」10%で、合わせると98%が必要と考えている。

●「一部は必要」と回答したカフェ（9件）が、必要と考える機能（複数回答）

1 「(5) 地域づくりの対話を生み・社会に発信する力」が、89%とトップ。

2 「(3) 情報を提供する力」78%

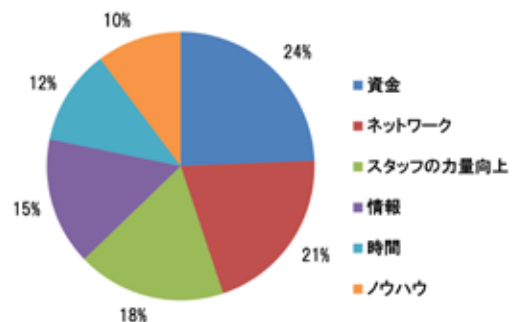
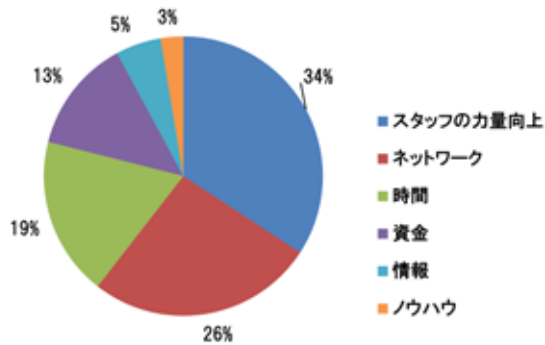
3 「(4) つなげる・引き合わせる力」67%

4 「(1) 持ち込める力」56%

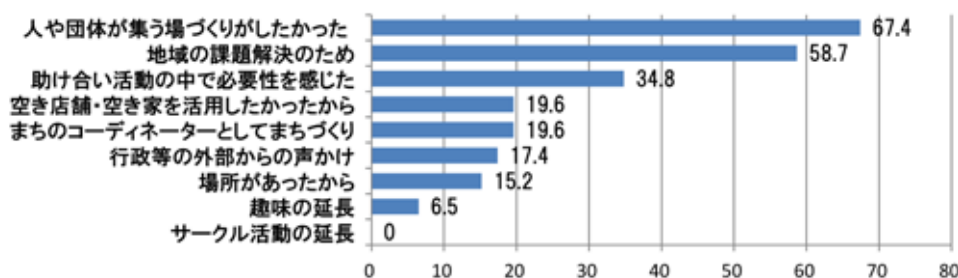
5 「(2) 利用者が自分の「やりたいこと」や「こんなことで困っている」のおしゃべりや相談」44%

●取組みの実施と継続に最重要で必要なもの1つ選択

●追加に必要なもの2つ選択



6 カフェ開店のきっかけ（複数回答）



■横浜市内コミュニティカフェアンケート回答カフェ一覧

	コミュニティカフェ名称	所在区	運営者
1	コミュニティ&シェアスペース KOTOBUKI	鶴見区	個人
2	ストーリー55	鶴見区	ストーリー55
3	よつばカフェ	鶴見区	個人
4	反町駅前ふれあいサロン	神奈川区	反町駅前ふれあいサロン運営委員会
5	みんなの食場	神奈川区	株式会社 Underline
6	横浜ノイエ	神奈川区	個人
7	Y カフェ パーショ	中区	公益財団法人横浜 YWCA
8	横浜パラダイス会館	中区	Art Lab Ova (アートラボ・オーバ)
9	コミュニティサロンおさん	南区	社会福祉法人たすけあいゆい
10	はまどま	南区	NPO 法人よこはま里山研究所 (NORA)
11	カフェらいさー	南区	合同会社カフェらいさー
12	めぐカフェ	南区	(公財) 横浜市男女共同参画推進協会 (男女共同参画センター横浜南)
13	港南台タウンカフェ	港南区	株式会社イータウン
14	サザンポート94	港南区	個人
15	ハッピースクエア	保土ヶ谷区	NPO 法人リロード
16	ハートフル・ポート	旭区	個人
17	地域交流拠点ひまわり	旭区	NPO 法人若葉台
18	ほっと・さこんやま	旭区	NPO 法人オールさこんやま
19	コミュニティカフェあんさんぶる	旭区	一般社団法人おもいやりネットワーク
20	結 cafe	磯子区	一般社団法人 re net 結
21	さくら茶屋にししば	金沢区	NPO 法人さくら茶屋にししば
22	コミュニティサロン「ほっこり」	金沢区	湘南八景自治会
23	UDCN 並木ラボ	金沢区	横浜市立大学
24	もりのお茶の間	金沢区	六浦東・まち交流ステーション委員会
25	街カフェ大倉山ミエル	港北区	NPO 法人街カフェ大倉山ミエル
26	大倉山おへそ	港北区	大倉山おへそ
27	地域福祉交流スペース COCO しのはら	港北区	NPO 法人びーのびーの
28	スペースナナ	青葉区	NPO 法人スペースナナ
29	3丁目カフェ	青葉区	株式会社3丁目カフェ
30	街の家族	青葉区	街の家族運営委員会
31	シェアリーカフェ	都筑区	NPO 法人 I Love つづき
32	ほっとカフェ中川	都筑区	NPO 法人ぐるっと緑道
33	いのちの木	都筑区	NPO 法人五つのパン
34	横浜の町工場の中にあるカフェ「DEN」	都筑区	一般社団法人 横浜もの・まち・ひとづくり
35	ふわり文庫	都筑区	個人
36	アスタカフェ	都筑区	NPO 法人アスタ荏田
37	コミュニティカフェ夢みん	戸塚区	NPO 法人いこいの家夢みん
38	ふらっとステーション・ドリーム	戸塚区	NPO 法人ふらっとステーション・ドリーム
39	ふらっとステーション・とつか	戸塚区	NPO 法人くみんネットワークとつか
40	こまちカフェ	戸塚区	NPO 法人こまちぶらす
41	カフェゆっくり堂	戸塚区	有限会社ゆっくり堂
42	東戸塚みんなの居場所お茶の間楽交	戸塚区	東戸塚みんなの居場所お茶の間楽交
43	moku cafe	栄区	NPO 法人みちくさみち
44	ファール ニエンテ	泉区	社会福祉法人開く会
45	コミュニティカフェ和 (なごみ)	瀬谷区	NPO 法人せや (南瀬谷自治連合会より委託)
46	街のつどいの広場「ほっとカフェ」	瀬谷区	街のつどいの広場「ほっとカフェ」

【参考】アンケート調査票

| 1

YOCN「カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及」事業 2017 年度報告書関連調査
横浜市内コミュニティカフェアンケート項目 *必須項目

●コミュニティカフェ名称 _____
 ●メールアドレス _____
 ●回答者氏名(運営責任者がご記入下さい) _____
 ●カフェ基礎情報 ※この項目は別部表裏しません

名称	
運営	
所在地	
エリア名	
開設	
営業日	
年間予算予算	記入は任意 約●万円(内訳:事業費●%,奨励助成●%,寄付●%,その他)
スタッフ	定数●名、非定数●名、有償ボランティア●名、ボランティア約●名
地域連携	可能な範囲で記入ください。
まちの事務用種別	可能な範囲で記入ください。

以下回答は、どのカフェが善えた内容か、わからない形でも選択しをお願いします。
 1 最も利用者が多い年代はどの年代ですか? *(4つまで選んでください)
 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代以上

2 カフェ定義との整合性確認
 ① 目的なく、誰でも利用できる* はい いいえ
 ② 飲食や販売、スペース貸など金銭のやりとりが可能* はい いいえ
 ③ 地域と社会につながる機会が用意されている* はい いいえ

3 カフェ型中間支援機能の有無確認
 (1) **持ち込める力** *
 カフェ利用者が自分の「やりたいこと(イベントの持込企画など)」や「こんなことで困っている」等のおしゃべりや相談が、お客さん同士で行われている
 ほぼ毎日 時々 ほとんどない
 (1)-1 どのような内容ですか? (あるもの全部)
 自分ごと(自分さがし) 趣味のこと 家族のこと 生活相談 介護 子育て
 障害 地域の資源 活動の資源
 団体運営 情報発信 起業 通車内 その他
 (1)-2 誰から持ち込まれますか? (あるもの全部)
 住民 自治会町内会 商店街 行政 地域ケアプラザ・地区センター等 NPO
 支援機関 その他(自由記述)
 (1)-3 事例(自由記述)
 (2) **開かれる力** (あるもの全部) *
 カフェの既存活動やイベント事業の企画や運営に関わる機会が用意されている
 カフェ運営にボランティア参加 事業イベントの企画に単発ボランティア
 実行委員などの継続ボランティア その他
 (2)-1 事例(自由記述)

横浜コミュニティカフェネットワーク <http://yokohama.ccn.jimdo.com/> yokohama.ccn@gmail.com
 〒234-0054 横浜市長瀬区津南町 4-17-22 キタビル 2F 横浜会館ラウンジ2階内 TEL:045-520-8550 FAX:045-852-3854

| 2

(3) **情報を提供する力** * 利用者の状況に応じて使える地域内外の情報を提供している
 (3)-1 どんなものを情報提供していますか? (あるもの全部)
 カフェで行われているイベントの情報 地域で行われているイベントや施設の情報 その他
 (3)-2 それらはどんなツールで発信していますか? (あるもの全部)
 ラシ スタッフの口頭 掲示板 ネット(ホームページ・ブログ・SNS) 紙媒体の情報誌
 その他(自由記述)
 (3)-3 どんな内容のものですか? (あるもの全部)
 営利 非営利 公的機関
 (3)-4 貴カフェでは情報提供しない(できない)ものはありますか? (自由記述)

(4) **つなげる・引き合わせる力** *
 地域の人や団体同士を引き合わせるなど、ゆるやかなつながりをつくることがある
 月に1回以上 年に数回 ほとんどない
 (4)-1 事例(自由記述)

(5) **地域づくりの対話を生み・社会に発信する力** *
 暮らし・地域や社会の抱える課題について考えるフォーラムや勉強会を、周囲に呼びかけて開催することがある
 やっていない これからやりたい やっている やっているがやめたい
 (5)-1 事例(自由記述)

4 貴カフェにとって3(1)~(5)のような取組みは、必要と考えますか? (現在やっているかは問わず) *
 はい いいえ わからない 一部は必要
 ●4で「一部は必要」と回答した方のみ、必要なものはどれですか? (いくつでも)
 (1) 持ち込める力
 (2) 利用者が自分の「やりたいこと(イベントの持ち込み企画など)」や「こんなことで困っている」等のおしゃべりや相談が行われている
 (3) 情報を提供する力
 (4) つなげる・引き合わせる力
 (5) 地域づくりの対話を生み・社会に発信する力
 4-1 その理由(自由記述)
 ●4で「はい」もしくは「一部必要」と回答した人のみ、3(1)~(5)のような取組みの実施と継続に最重要で必要なものを1つ選んで下さい。
 スタッフの力量向上 資金 時間 ネットワーク 情報 ノウハウ その他(自由記述)
 ●4で「はい」もしくは「一部必要」と回答した人のみ、3(1)~(5)のような取組みの実施と継続に追加に必要なもの(上記「最重要で必要なもの」以外)を2つ選択して下さい。
 スタッフの力量向上 資金 時間 ネットワーク 情報 ノウハウ その他(自由記述)

5 カフェ開店のきっかけは何ですか? (複数回答) *
 趣味の延長 サークル活動の延長 地域の課題解決のため
 助け合いの活動をやる中で必要性を感じた 人や団体が集う場づくりがしたかった
 まちのコーディネーターとしてまちづくりをしていた 行政等の外部からの声かけ
 空き店舗・空き家を活用したかったから 場所があったから
 その他(自由記述)

お忙しい中、ご協力ありがとうございました。

横浜コミュニティカフェネットワーク <http://yokohama.ccn.jimdo.com/> yokohama.ccn@gmail.com
 〒234-0054 横浜市長瀬区津南町 4-17-22 キタビル 2F 横浜会館ラウンジ2階内 TEL:045-520-8550 FAX:045-852-3854

伴走会議

伴走会議は、5つのコミュニティカフェの中間支援機能の強化に、YCCNメンバー数名が伴走することによって、個別カフェの力量向上と、YCCNの支援力向上の両方を狙って実施をした。

<実施概要>

●伴走会議受入れカフェ（カッコ内は、区・伴走開始年度・伴走期間）

- 1 大倉山おへそ（港北区・2015年～・3か年）
- 2 シェアリーカフェ（都筑区・2015年～・3か年）
- 3 ハートフルポート（旭区・2016年～・2か年）
- 4 反町駅前ふれあいサロン（神奈川区・2016年～・2か年）
- 5 コミュニティサロンおさん（南区・2016年～・2か年）

●実施経過

・初年度（2015年度）

本事業企画段階で受け入れを想定（希望されていた）2つのカフェ（シェアリーカフェ、大倉山おへそ）で伴走を開始し、各カフェに2～3名を伴走担当として実施した。各カフェの状況に応じて3～4回の会合やワークショップ、個別の連絡打合せを行った。

・2年目（2016年度）

2つに加えて、新たに3つのカフェを伴走先として追加することとし、受入れカフェを公募した。3団体からの応募があり、選考を経て3つのカフェへの伴走を決定、各カフェに2～3名の伴走担当者を置き、3～4回の会合やワークショップ、個別に連絡打合せを行った。

・3年目（2017年度）

5つの伴走先カフェの集合研修（コーディネイトの活動事例に学ぶ・各カフェの取組み共有と学びあい）を実施。各カフェの状況に応じて、1～2名の担当者が連絡打合せを行いながら、各地域で「地域フォーラム[※]」を開催した。

※地域フォーラム

カフェが立地する地域づくりや独自テーマを設定して、多様な参加を得ながら、コミュニティが持つリソースの共有と今後の展開について考える場を、伴走受入れカフェが中心となって企画コーディネイトし実施するもの。

●伴走会議の成果としての「地域フォーラム」について

「住み開きフォーラム」「音楽によるまちづくりイベント」「地域リソースの発掘共有ツアー」「区内コミュニティカフェが集う地域づくりフォーラム」「商店街と地域住民をつなぐまちづくりワークショップ」など、それぞれのテーマで、1～2回ずつのフォーラムを開催した。実施のために別財源を確保する、事前に下見を実施することで関係者にコンセプト共有し関係性を深める、カフェ内部で地域づくりに対するスタンスについて話し合うなどの準備が行われ、その実施を契機に、新たなリソースや経験を獲得、一定の力量向上ができたように思われる。

●伴走会議から見えてきた「伴走支援」のポイント

① 支援のねらいの理解度

伴走支援がどういったねらいで、何を指すものなのか、カフェの責任者はもちろん、カフェ関係者が十分理解した上で、支援が実施されることは大前提として重要である。

② 一定期間の継続関与

今回の伴走会議は、中間支援機能の強化がテーマであったが、伴走に入った初期は、どのカフェも、経営面の不安や組織体制・外部との協力関係に、課題などを抱えており、そうした課題や不安の共有なしに中間支援機能強化を検討する意識をつくることは難しかった。半年から1年は、経営・組織課題を「整理」することの時間を要した。こうした本来テーマの支援に入る「準備期間」的な時間を一定の長さで持つことで、伴走担当者との信頼関係づくりや中間支援機能に取り組む姿勢を整えることにつながる。

③ 第三者性

伴走受入れカフェの中でも、スタッフ間で「カフェへの思い入れや優先度」、「カフェ型中間支援に対する理解度」に違いがあり、中間支援経験や外部ネットワークを既に有するメンバーとの温度差があった。コミュニティカフェは、勤務体制にボランティア要素が強く、縦型でなく横型の民主的な合意形成スタイルが多い。コンセプトやカフェ型中間支援機能の意義、力量形成のモチベーション向上を内部だけで行うことは難しい。「伴走会議」をきっかけに、外部から来る第三者の関与で、話し合えることや共有できるものがあり、その意義は大きい。

④ 当事者性

日常のカフェ営業やイベント実施の合間に、伴走会議の受入れや内部打合せ、地域フォーラムに関する調整を行うことは、現場に相当な負担感がある。内部スタッフとの合意形成も、カフェ責任者にとっては、気をもむ要素の一つでもある。そうした負担感を感覚的に理解でき、かつ現場側から「理解してもらえる」と感じ支援内容を受入れられるのは、実際にカフェを運営する実践者が、伴走に入る意義である（その場合、伴走に入る実践者が、中間支援力を一定以上有していることが前提）。支援に入る側にとっても、自カフェを客観視する機会になり、相乗効果が得られる。

Case01 ー大倉山おへそ

■伴走会議

個別伴走会議開催概要

2015年度	年3回開催
2016年度	年3回開催
2017年度	年2回開催

●これまでの課題や現状、伴走会議での取り組み

・代表交代によるおへその運営体制について

伴走会議2年目の2016年、おへそは代表を交代することになりました。代表を交代して間もなく、これからのおへその運営を考えた時に、代表二人で意見が一致したことは、以前から二人でやっていた「朝活部」のような雰囲気になりたいという事でした。誰でも気軽に遊びに来ることが出来、知らない人同士でも話がはずみ、人と人が自然と繋がって、それぞれが好きな事や得意なことを持ち寄って一緒に時間をシェアする、そんな場を作っていきたいと方針を大きく転換しました。商店街のイベントでも、今までは全部自分達で動いていたものを、人を見つけて担当をお願いするようにしていきました。七夕やハロウィンでのワークショップやチラシのデザインなど、今まで抱えてたものを少しずつ他の人にゆだねていく事により、業務負担の軽減と共に一緒にやる事での新しい発見やそこから新たな取り組みへの発展など、今までと違った流れが出来てくるようになりました。



●伴走会議で得た気づきや成果など

・一緒にイベントを行う商店会の方との連携について

それまでは、「地域の方に楽しんでもらえるようなイベントを開催する」ことに主眼をおいていましたが、イベントは開催するだけでは十分とは言えず、一緒にイベントを行う商店会の方に対しても自分事として関わってもらえるようにイベントの企画の段階から意見を伺ったり、また開催後に報告するなど、私たちが考えている事やどんなことをしているのか、きちんと理解してもらうことが必要だと気づきました。直接会いに行く、顔を覚えてもらう、ほんのわずかな事ですが、少しずつの積み重ねで商店会の婦人部の方とも話しやすくなったり、イベントの時には飲食ブースを担当してもらえたり、商店街の店舗からは商品をお預かりして代わりに販売させていただくこともできるようになりました。それまでも自分たちでは商店街のためにやっているつもりでいましたが、それはほとんど伝わっていませんでした。伴走会議の中で相手に分かってもらえるように「伝えていく」ということがもっと必要だと気づくことが出来ました。

●今後目指すべき姿や事業イメージ

今後は地域に少しずつ芽吹いてきた人のつながりを広げ、地域で何かやってみたくて思っている人が一歩を踏み出すきっかけ作りができるといいなと思います。



■地域フォーラム

●フォーラムの概要

- ・実施日時:2017年7月9日 19:00～21:00
- ・場所:大倉山おへそ ・参加者数:21名

- ・実施日時 2017年12月2日 18:30～20:30
- ・場所 大倉山おへそ ・参加人数 17名(主催者含む)

■実施内容:

エルム通り商店街の店舗オーナーをお招きし、参加者(地域住民)へ向けて自身のお店のこだわりや、地域との関わり方をお話いただきました。その後、店舗より取り寄せた軽食をとりながらの交流会で、大倉山でやってみたいこと等を参加者に付箋に上げてもらいました。それを元に、実現できそうなものを皆で洗い出していき、参加者自身がまちづくりのプレイヤーとなるイメージを固めて頂きました。



●実施目的やその理由

利便性の高いショッピングモール等がある中、地元にあるお店のこだわりやきめ細やかなサービス等を知って頂くことで、より愛着を持って地元で買い物を頂き、また、商店街の方には地域住民のニーズを直接聞ける機会として実施しました。しかし、最終的な狙いとしては、買い物客と店のオーナーという関係にとどまらず、実現できそうな事を両者で共有することによって、一緒に街を盛り上げていく仲間としての関係をより強く築き上げていくことだと考えています。

●試みた連携・協働や、その成果や得た気づき

商店街の方々の工夫や裏話などを知ったことでより関心を持ってくださる方が増え、これまで地域活動に一步踏みとどまっていた層を巻き込みながらの企画が増えました。地域の学校との連携も進み、地域全体としてのまちづくりの意識が高まったように思います。今後も回数を重ねていくことの必要性を感じました。

■伴走者からのコメント

大倉山おへその伴走は、3年かけて実施しました。初年度は、中間支援機能を果たす上での商店街など外部組織とのコミュニケーションが主テーマとなり、外部支援者として関係者ヒアリング等を行いました。こうした取り組みを、団体そのものの力量形成にどうつなぐか迷う中、おへその代表者が代わり、後半2年は、新代表の小澤さん・小松さんに伴走する支援事例となりました。

まず新共同代表の二人が目指したい場のコンセプト共有をサポートし、方向性を定めた上で、恒例の季節イベント実施ごとに、伴走者が加わる振り返りを行いました。イベントの成果や課題を確認、協力者の掘り起こしや主体性を引き出す参加のデザイン、事業ごとに団体と地域にとっての目標を達成していくこと等を意識化し、経験から学べるよう努めました。お二人は力量形成に意欲的で、その姿勢が伴走会議をうまく活かされたと感じます。各種市民活動支援講座にも参加、ネットワークづくりにも努められていることに、敬意を表したいです。3年目の地域フォーラムでは、商店街関係者と地域住民が対話するイベントを実現され、伴走会議後も人のつながりや活動がさらに広がりそうです。【伴走支援担当 米田佐知子】

Case02 –シェアリーカフェ

■伴走会議

個別伴走会議開催概要

2016 年度	年 3 回開催
2017 年度	年 2 回開催

●これまでの課題や現状、伴走会議での取り組み

NPOとして拠点、カフェをオープンしてしばらくすると、地域の情報発信したい人が次々集まってくるようになり、毎日のように講座やイベントが開かれるようになりました。毎日走りながら運営し、現状を把握する余裕がないまま赤字経営となり、次第に疲弊することも多くなりました。伴走会議では、いままでの振り返りをし、外部からの視点でアドバイスをいただきました。

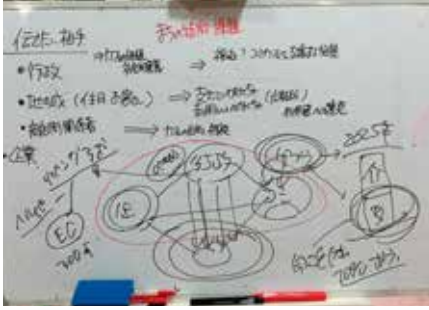
●伴走会議で得た気づきや成果など

内部でのワークショックでは、どんな思いから生まれたカフェなのか、どんなことが提供できるのか、を深掘りしました。①シニア層が増えて来ているが、具体的にそこにリーチする事業ができていない、②相談ごとの持ち込みが多く、それにスタッフが時間を費やしていることなどを可視化しました。2年目には、①の課題に対して、有料老人ホームからの委託で、毎月1回カフェからのイベント出張を行ってみました。さらに携帯電話会社の委託で当団体スタッフが講師を勤め、月1回程度の女性のためのスマホサロンを行いました。②の課題に対しては、視察も増え、コンシェルジュ機能の要望も多くなったため、コンシェルジュをメニュー化し、有料で相談を受けるように整備しました。さらに、都筑区内のコミュニティカフェを運営する方たちに来ていただき、取り組みの情報交換をし、課題を共有する場を持ちました。3年目に入り、助成金を申請し、コミュニティカフェの可能性を探る趣旨で、連続で勉強会を行いました。講座は毎回関心が高く、予定していた20名を超える、多くの人たちが参加し、交流を促すこともできました。

●今後目指すべき姿や事業イメージ

今回の伴走会議で、中心メンバーだけでなく、各スタッフがコミュニティカフェの機能を明確に意識し、各スタッフ自らが企画を立て、実行し、新たなプロジェクトが生まれました。具体的には、都筑産の小麦と野菜を使った商品化プロジェクトを立ち上げ、地域の農家、商店、学校や保育園、料理教室、行政等の異ジャンルの人たちをつなげるコミュニティが生まれました。また、カフェ内にレンタルギャラリーボックスをつくったことで、ボックスのオーナーさん同士のコミュニティも生まれています。コミュニティFMに番組をもつ、区内の企業さんと連携し、「横浜北部おしゃべりナイト」などの新たな異業種交流会を行い、その中で地域連携について話し合うワークショップも行いました。大家さんである企業、ハウスクエア横浜と連携し、ハウスクエア内でのイベント委託を毎週のように受けるようになりました。今後はさらに地元企業とも連携し、活動の幅を広げていきたいと考えています。





■地域フォーラム

●フォーラムの概要

- ・実施日時 2017年12月8日(金) 18:30～20:30(終了後交流会)
- ・場所 シェアリーカフェ ・参加人数 30名

タイトル:都筑区版コミュニティカフェフォーラム～地域の中の「場」が、まちづくりに果たす役割とは？ コミュニティカフェの現場からの報告を中心に

■実施内容

都筑区のまちづくりの中でコミュニティカフェと呼ばれる空間や組織が、どのような役割を果たしていけるのかをテーマに、円卓会議方式でディスカッションしました。

ステークホルダー: 田中礼子(都筑区区政推進課長)、下村幹夫(都筑区地域振興課長)、小西祐子(都筑区福祉保健課長) 中聡美(シェアリーカフェ:地域の間支援的な役割を果たす)、塩入廣中(ほっとカフェなかがわ:地元商店街とタックを組んで、街の活性化に関わる)、男澤誠(DEN:横浜の町工場の中にあるカフェ、スタートしたばかり)、岩永敏朗(いのちの木:障がい者の自立支援、高齢者のスキルを活用する事業)、江幡千代子(ふわり文庫:自宅の一室を解放して「本」を核にした場づくり)、司会進行 岩室晶子(シェアリーカフェ)ファシリテーター 齊藤保(港南台タウンカフェ)

●実施目的やその理由

区内で次々に生まれている、コミュニティの場についての意見交換をし、どのように行政と連携していけるかを考える機会をつくった

●試みた連携・協働や、その効果、得た気づき

まちの中にこんな「場」があったら、とスタートし、「場」を作ることで集まってきた人たちから、コミュニティが生まれている。持ち込まれる相談も多く、お茶1杯では赤字経営になってしまう、マンパワー不足が起こる、など民の運営の限界を共有しました。行政の立場からは、自治会町内会の仕組みではフォローできないことを、地区センターなどが担うようになってきて、さらにそこから、市民活動が担うことも増えてきた。このような活動の価値をちゃんと評価して行きたいと、理解を深めていただきました。まとめとして、コミュニティカフェの価値は、行政も地域も認めているが、その価値を見える化していく必要がある。他の地域の事例も参考に、今後も連携できることを模索して行くことを共有しました。

■伴走者からのコメント

シェアリーカフェの伴走は3年間かけて実施しました。初年度は、コミュニティカフェとして相談などの中間支援機能を担っている手応えを感じながらも、収益につながらないもどかしさを共有しました。一方で飲食事業推進による収益改善も喫緊の課題としてあげられ、事業性と公益性のバランスの難しさをスタッフ一同で学び確認できました。2年目からは、行政も含めた地域へのアプローチを挙げたことで、近隣の高齢者施設との連携が生まれたり、都筑区内のコミュニティカフェ実践者も巻き込んだ勉強会にまで展開していきました。そして3年目の地域フォーラムでは、区役所の3課の課長3名とコミュニティカフェ実践者5名が同じ円卓につき、対等な立場で、コミュニティカフェと区民活動支援センター機能を果たす役割について語り共感し合う貴重な時間を共有するに至りました。事業化しづらい中間支援機能ですが、公的機関や地域の理解により、一步次のステージに向けて考えられるきっかけができた成果は大きいと感じます。

【伴走支援担当 齋藤 保】

Case03 –ハートフルポート

■伴走会議

個別伴走会議開催概要

2016年度	年3回開催
2017年度	年2回開催

●当初の課題

- ・目の前のことをこなすことで精一杯で、結構行き当たりばったり。
- ・店主の想いが走りすぎる傾向にあり、スタッフに十分に伝わっていなかった点もあり。
- ・カフェが担う「中間支援」といった認識がスタッフの中で浸透していなかった。
- ・人的配置がうまくいっていなかった。
- ・カフェ部門と事業部門の両立の体制ができていなかった。

●伴走会議でどういう取り組みを行ったか

- 2016年の3回の伴走会議では、スタッフを交えて以下の点について取り組んだ。
- ・5名のスタッフがお互いをより知るためのワーク。
 - ・自分たちが実際にやっている「カフェ型中間支援」について認識を共有した。
 - ・ハートフル・ポートの強みと弱み・持っている資源を可視化した。
 - ・中間支援的役割を3年後にどう実現していくか。それぞれの役割分担を再認識した。
 - ・スタッフの力量を十分発揮できる配慮できるようなシフトの組直しをし、それぞれにあった働き方改革をすることで、人件費を抑えつつ、時給もアップできた。

●伴走会議の結果（得られたもの）

- ・当事者だけでは見えないこと、方向性などへ客観的な立場でアドバイスをいただけたことで、やるべきことが見え、即行動に移せるようになった。
 - ・やりたいことがどう地域の貢献のために役立つのかといった意識へ変わっていった。
 - ・コミュニティカフェが担う中間支援的な役割について、スタッフも認識を共有できたことで、お客さまへの対応もかなり変わり、心の余裕も生まれてきた。
 - ・この場所が地域にはなくてはならない場所という認識をスタッフだけではなく、お客さま自らも持ってくださいようになり、この運営にも関わってもらえるようになった。
 - ・それまでは単独で活動をしていたお客様同士が、この街の繋がりを生むような活動、街を元気にするような活動をしたという想いへと発展し、住民自らが街づくりの担い手となる活動へと発展するきっかけとなった。
- コミュニティカフェの運営は、志があってもなかなかその想いを形にしていくことは容易ではない。地域の交流拠点として中間支援的役割を発揮するために、YCCNのような第三者機関の手が入ることで、場が持つ力を気づかせていただき、自分たちの活動に対して自信と誇りを持つことができた。カフェという気軽に立ち寄れる場所だからこそ、人と思いが集まり、地域の繋がりを生む場となり、自分たちの街への愛着をも育み、街づくりへと発展していく土台が築かれたといえる。





■地域フォーラム

●フォーラムの概要

1. 住み開きセミナー@場所：ハートフル・ポート
 - ①住み開きカフェセミナー 2017年11月6日(参加者24名)
 - ②住み開き実践者の本音トーク 2017年12月1日(参加者31名)
2. 音楽を通じて街を元気にするプロジェクト
 - ①誰でもコンサート 2017年11月29日(参加者22名)@ハートフル・ポート
2018年1月20日(参加者40名)@ミュージックサロンおんぶ
 - ②「この希望の街で」レコーディング
2018年2月12日(参加者16名)@ハートフル・ポート

■ねらい

ハートフル・ポートの強みを活かした活動。

1. 家というプライベートな場をパブリックに開く「住み開き」の活動を広める。
2. 希望が丘という街を音楽でつなげ、音楽を通じて元気にしようという活動を、ハートフル・ポートに集まる音楽家を中心に発展させる。

●結果

1. 住み開きセミナーを2回開催。①ハートフル・ポートの住み開きカフェとしての3年間の活動を基に、住み開きをする上でのコツや大切なことについて関心のある人達と一緒に話し合った。②いろいろなスタイルの住み開きについて住み開き実践者5名に登壇してもらい、話をしてもらう。2回とも満席の大盛況。関心の深さを実感するとともに、住み開き活動の魅力を発信し、活動を始めたい人の一歩を踏み出すきっかけとなった。
2. 地元に住む音楽家達が自ら横のつながりを作るネットワーク(まちフェス実行委員会)を作り、商店街や自治会などと連携して希望が丘を音楽の街としてプロデュースする土台作りができた。気軽に音楽を楽しめる街にするため、音楽が好きな人は誰もが人前で演奏できる「誰でもコンサート」を2回開催。希望が丘の街の歌「この希望の街で」を住民自らが作りCD化するためのレコーディングをハートフル・ポートで実施。今後はこの歌を街のパブリックソングにし、街のいろんなところで歌ってもらい、地域住民同士の繋がりをつくるきっかけと発展させていく。



■伴走者からのコメント

もともと店主の五味さんの場のデザイン力と包容力があり、またスタッフの方のそれぞれの得意がうまくかみ合っておりお店としても多くのお客様に支持され愛されている場だった。

伴走会議ではまず最初に一人一人の思いや関わりについての理解を丁寧に時間をかけ、一人一人描く3年後のカフェの姿について共有をした。様々な未来像が出た中で、「中間支援」における未来像に焦点を絞り、今できていることや更に進化させられることを徐々に整理をした。プライベートの空間としての自宅と外に開き「共」や「公」として共有空間になっている特性を踏まえながらも、五味さんが更に住み開きへのニーズにこたえていけるか、どのようにカフェの中で地域資源をみんなでつないでいけるかを真剣に議論をしていた様子が印象に残っている。最後は、みんなが知っている資源を書き出すことでカフェの中での「つなげる」機能の強化を目指した。本事業のみならず様々な取り組みの結果、カフェの居心地の良さを保ちながら住み開きの講座を開くなどの積極的な展開が加速した一年となった。互いのペースや個性を尊重しあうチームの文化があり、それがこういった事業展開の豊かさにもつながっていると感じた。【伴走支援担当 森祐美子】

Case04 ー反町駅前ふれあいサロン

■伴走会議

個別伴走会議開催概要

2016年度	年3回開催
2017年度	年1回開催

●これまでの課題や現状、伴走会議での取り組み

サロンの日常を見ていただいたり、事務局会議や合同運営会議にも出ていただいたりして、以下のようなアドバイスをいただくことができました。

- ①駅前にあるという利点を生かしきれていない。
- ②多様な人たちが運営しているところは素晴らしい。
- ③もっとSNSを活用すべき。
- ④福祉施設という認識にされがち。一般の人がもっと入りやすくする工夫が必要
- ⑤運営に若い人が加わる工夫が必要

これらの課題を意識して、ワークショップを開催しました。ワークショップには、サロンに関わる幅広い人たち（例えば、町内会長、商店街会長、神奈川区障害者地域作業所代表、神奈川区役所関連部局、ステーション市民ボランティアの私たちなど）が参加しました。



●伴走会議で得た気づきや成果など

サロンの改善点として、入りやすくするレイアウトの工夫が必要。一般の人が入りやすくするため、「ウクレレで歌おう」の開催など活性化の工夫を具体的に試みました。長期ではさらに皆で元気が出る改善に取り組もうという兆しが出てきました。一部は既に実施したところです。

●今後目指すべき姿や事業イメージ

2016年度の伴走支援により、サロンを客観視することができたと思います。反町駅前ふれあいサロンは多くの関係者がいるので調整には苦勞しているわけですが、ワークショップを開いたところ、未来のサロンに関しては多様な関係者が皆、明るい展望を話したことは本当に驚きました。

今後もこのような集まりを持って未来展望を皆で考えていこうという機運がうまれたことはとてもよい機会になったと思います。





■地域フォーラム

●フォーラムの概要

- 実施日時：2017年12月1日（金）13:30～16:30（懇親会 17:00～20:00）
- 場所：反町駅前ふれあいサロン、（しえあひるずヨコハマ）
- 参加者数：30名

■実施内容：

反町ツアー 13:30～15:00 反町駅前ふれあいサロン→ヨリフネ→NAGIコーヒー→みんなの食場→青銅茶房→ギャラリーカオル→カメヤ食堂→反町駅前ふれあいサロン（写真1、2）

反町地域フォーラム 反町駅前ふれあいサロン（写真3）15:00～16:30

懇親会 しえあひるずヨコハマ（写真4）17:00～20:00

反町ツアーでは反町における多様なコミュニティカフェを訪れ、人と人の思いをつないでいる場所の雰囲気を体験することができました。地域フォーラムでは反町駅前ふれあいサロンと、しえあひるずヨコハマの活動を発表。その後参加者と意見交換。

●実施目的やその理由

反町駅前ふれあいサロンは緑道の集会所であり多くの制約があり、ここでの活動の場を今まで以上に広げることは難しい面があります。反町には多様なコミュニティカフェなどの立地が見られます。そのような場所をネットワークしていく機能をサロンが持っていくことがよいのではないかとこの地域フォーラムを実施しました。

●試みた連携・協働や、その成果や得た気づき

反町の事業経営の皆さんは、お店だけでなくまちづくりに強い関心・志を持った方々であることがわかりました。今後の反町におけるネットワークづくりに加わってもらうことが可能という感触を得ることができました。また客観的にサロンを見ていただき、私たちもこれからのサロンの方向を考えるいい機会になりました。



■伴走者からのコメント

反町駅前ふれあいサロンは駅改札口前という立地も、地域団体との協力関係も申し分のない条件でしたが、いくつかの制約もある中でこれまでそれらを充分生かし切れていなかった面がありました。しかし今回の伴走支援や、ワークショップ活動を経ることで、一歩殻を破る行動ができました。

特に地域フォーラムとして開催された街歩きで、商店街の方々の「魅力ある街づくり」に対する熱い志に触れ、サロンの存在意義や幅広いネットワークづくりの方向性が見えてきたのではないのでしょうか。反町のまちづくりのハブとして、その立地が生かされることを引き続き期待しています。

【伴走支援担当 阿部茂男】

Case05 ーコミュニティサロンおさん

■伴走会議

個別伴走会議開催概要

2016年度	年3回開催
2017年度	年2回開催

●当初の課題（伴走会議が入った時どうい状況だったか）

前団体から2015年12月18日に事業を継承し、休止状態であったサロンの再開を実施してから1年半が経過した。昼食の提供を始めて2か月が経過し、下記の4点についての課題が浮かび上がってきました。

- ・就学児童の利用の拡大
- ・こども食堂や、子どもに対する学習支援の具体的な事業計画
- ・運営委員会とは別にサービス検討委員会を設け、有効に機能させる事
- ・コーディネート機能をどのように機能させていくのか

●伴走会議でどういう取り組みを行ったか

「おさん定例職員会議」へ出席して頂き、コミュニティカフェ初心者であったスタッフの困りごとや課題の共有とその解決方法について、話し合いによる合意形成の過程を共有することが出来ました。自分たちの目指す「コミュニティサロンおさん」は何か、ある程度の共通認識と期待される役割について、職員自身の気づきと理解が次のステップにつながりました。「コミュニティサロンおさん」の良いところを確認しあい、スタッフ自身のモチベーションをアップする事ができました。

コミュニティサロンおさんの課題をYCCN事務局から他のコミュニティカフェにもメールで発信して頂き、他のカフェでの解決方法を教えて頂き、共有することが出来ました。困った時に他のカフェのやり方を伺える事がスタッフの安心感につながり、様々な対応方法がある事を知ったことで「こうでなくてはならない」という固定概念から、いろんなやり方があっても良いという発想の広がりにつながりました。

●伴走会議の結果（得られたもの）

コミュニティカフェのもつ「コーディネート機能」の理解について、「コミュニティサロンおさん」では何をしていく必要があるのか、スタッフ自身で考え続け、試行錯誤しながら進めていくことがコーディネートの第一歩につながると認識してくれた事は大きな一歩でした。スタッフが当たり前に行っているコミュニケーションが来館者同士をつないでいること、「コミュニティサロンおさん」の前で入ろうかどうか迷っている人がいたら、スタッフが自ら外に出て声をかけ、中に入って頂き初めて利用される方でも心地よく過ごす事が出来るコミュニケーションをとることで、やがてその方の居場所の一つとなり新しい人との交流が始まるきっかけになっています。来館者同士をつなげる機能を「コミュニティサロンおさん」が果たしている事を来館者も認識されている事はとても大切なことです。近隣に住む赤ちゃんからお年寄りまで「おさんに行けば、誰かいて、心地よく過ごせる」そんな場所になりつつあります。昨今の子どもの育つ環境の変化についても理解を示してくれる方が多く、来館する子どもたちを時に暖かく、時に厳しく接してくれます。子どもの支援の重要性を再認識し、こどもの成長を長く見守る場所である事を来館者も認識してくれた事で、コミュニティサロンおさんの近隣小学校の児童が多く集まる様になり、当初の課題である就学児童の利用の拡大につなげることができました。今後も近隣住民である来館者の力も良い意味で巻き込みながら、コミュニティサロンおさんを通じて様々な広がりが継続出来ればと考えています。





■地域フォーラム

■フォーラムの概要

- ・実施日時：2017年11月26日
- ・開催場所：コミュニティサロンおさん
- ・参加人数：13名（主催者含む）

●目的

- ・他のコミュニティカフェの事例等を知ってもらい、コミュニティカフェの役割とその必要性を再認識してもらう。
- ・地域の方々におさんで実施している子どもを支援する活動（学習支援、食事支援、居場所づくり）を知っていただく。
- ・おさんが果たす地域づくりの役割について報告し、地域のニーズについて認識してもらい協力をあおぐ。

●参加者

近隣地区連合町内会長、地区社協事務局長、民生児童委員、ボランティア他

●結果

- ・人として尊重される場の必要性を参加者が認識してくれたことで、コミュニティサロンおさんが人と人をつなぐ役割を理解してくれたことで、閉じこもりがちな一人暮らしの高齢者に「おさん」のPRをしてくれた。→おさんで昼食をとる様になって栄養状態が改善した。
- ・食事支援、学習支援を通じて児童を取り巻く環境の厳しさを理解して頂き、学習支援の効果について改めて認識してくれたことで、効果測定的重要性を理解してくれた。
- ・なんとなく「おさん」がどういうところなのかは知っていたが、具体的な活動内容と成果について理解が得られ、支援が必要な子どもやその保護者に声をかけてくれるようになった。
- ・おさんを利用している子どもたちに来館者が自然に声をかけてくれる機会が増え、公共のマナーについてスタッフだけではなく、来館者である大人が注意を促す場面も増えた。
- ・食事支援の重要性をいろんな人に伝えて下さり、食材の寄付につながった。



■伴走者からのコメント

コミュニティサロンおさんは、当初運営していたNPOが運営困難となり、地元で長年たすけあい・福祉活動を担ってきた社会福祉法人たすけあいゆいが運営を引き継ぐ形でのスタートとなりました。その経緯において、地元の自治会町内会や商店会、地域活動団体、学校、福祉事業者らとの関係性を丁寧に築きあげてきたプロセスから成果報告会はこうした地元のステークホルダー向けの理解をより深めていただき、今後の活動につなげていく方向性が見いだせたと感じました。2年目の伴走会議では、現場で関わるスタッフが非常勤も含めて全員参加型で、おさんが持つ特性を理解し、現在の課題をあげて解決していく方策を探るワークショップを行いました。自分たちの意志でコミュニティカフェを立ち上げたわけではない福祉団体の職員だからこそそのプログラムでしたが、その中でどんどん主体的な意識が形成され、利用者さんとの丁寧な関係が浮き彫りになり、さらには地域との関わりを考える上で重要なプロセスになったと感じました。地域フォーラムでの成果共有も含めて今後どう地域への働きかけを発信できるか大いに期待したいものです。【伴走支援担当 齋藤保】

コミュニティカフェが持つ、中間支援機能の可能性とは

名和田 是彦 (法政大学法学部教授)

* 2015 年度中間報告書コラムより抜粋

3. コミュニティ・カフェの歴史的意義 ～より開かれた「公共の場」を目指して～

(1) 既存の施設に何が足りないのか

今や集会施設、地域施設は、ここまで地域のつながりを重視している。

にもかかわらず、ここに、地域交流の促進を求めて、経済的リスクまで背負って、コミュニティカフェを運営しようとする人々がいる。しかもそうした活動に対して、行政も助成金その他の様々な支援をしようとしている。

なぜであろうか？

ここまで集会施設が成熟し、整備されても、なおなにかが足りないのであろうか。

それはおそらく、既存の集会施設には、やはり用事のある人、目的意識を持った人しか行かないという限界があるためであろう。それは、すでに仲間となった人たちが、その仲間の力によってあることを成し遂げようとするために使う施設なのである。

(2) コミュニティカフェは「公共」の場

仲間だけで構成されるつながりが「共同体」(ゲマインシャフト)であるのに対して、「公共」とは、不特定多数の人々で構成される空間のこと(ゲゼルシャフト)である。

「共同体」つまり仲間は、きわめて重要である。それなくしては地域の課題解決もできない。しかし、仲間を見つける(拡大する)ためには、まだ仲間でない人と出会い、交流し、話をし、共通点を見出し、仲間づくりをしていく必要がある。

「公共」においては人々は他人同士なのだから、最低限度のルールとエチケットだけを共有し、人として尊重し合い、交流する。人は、仲間かどうかにかかわらず、単に「人である」というだけの理由で尊重される。こうした出会いを通じて仲間が見つかり、広がっていくはずである。

こうした「公共」の空間をわたくしたちはこの数十年の間に失ってきた。

コミュニティカフェに入れ込んでいる人たちは、こうした状況が地域のつながり(仲間づくり)の障害となっており、地域の希薄化につながっていることに、本能的に気づいている。「顔の見える関係づくり」のためには、「まだ顔の見えていない人たち」と出会い、交流し、話をし、仲間になってもらわなければならない。しかし今、そういう人と出会う場がないのである。

(3) コミュニティカフェに注目する様々な人々

YCCN だけを見ても、コミュニティカフェは多様であり、いくつかの類型に区分できるように思われる。その精密な類型設定は来年度以降の課題としたいが、ソーシャルビジネス的志向からコミュニティカフェへと至ったもの、福祉的発想の活動からコミュニティカフェへと至ったもの、自治会・町内会の新たな展開を求めてコミュニティカフェへと至ったもの、などがあると思われる。

この類型ごとに、コミュニティカフェの意義の考え方や運営の仕方などに多様性があり、それがコミュニティカフェの奥深さにもなっている。しかし、上記の意味での「公共の場」を再建したいという本能的気づきは共通しているように感ずる。

今や地域のつながりづくりを、「まだ顔の見えていない人たち」に組織と場を開くことによって「顔の見える関係をつくる」というやり方で実践しようとする多くの人々がいる。この人たちは、コミュニティカフェないしそれに類似したオープンな場づくりを志向している。

横浜市内の

コミュニティカフェ

紹介

YCCN 会員カフェと本事業関連の常設コミュニティカフェを紹介するコーナーです。

青葉区	3丁目カフェ スペースナナ
旭区	ハートフル・ポート 地域交流拠点ひまわり ほっとさこんやま
神奈川区	反町駅前ふれあいサロン
金沢区	さくら茶屋にししば ほっこり UDCN 並木ラボ
港南区	港南台タウンカフェ
港北区	大倉山おへそ 街カフェ大倉山ミエル
都筑区	いのちの木 シェアリーカフェ
鶴見区	コミュニティ & シェアスペース KOTOBUKI
戸塚区	こまちカフェ コミュニティカフェ夢みん ふらっとステーション・とつか ふらっとステーション・ドリーム
保土ヶ谷区	ハッピースクエア
南区	コミュニティサロンおさん はまどま カフェらいさー

3 丁目カフェ

【青葉区】



運営	株式会社 3 丁目カフェ
所在地	青葉区美しが丘 1-10-1 ピースフルプレイス 1-B (東急田園都市線たまプラザ駅徒歩 5 分)
開設	2014 年 8 月
営業日	・ホール貸切営業：1 年 365 日 10:00 ~ 22:00 ・カフェ営業：火曜～金曜 10:00 ~ 18:00
スタッフ	有償常勤マネージャー 1 名、有償スタッフ 15 名 (パートさん、シフト制)
特徴	当初美しが丘 3 丁目の住宅街に、近隣の高齢者に休息・交流の場所を提供する小さなカフェを開く予定が、地区計画など課題をクリアするためには十年以上必要となるため待ち切れず、代替に開設が容易な商業地域 1 丁目に、比較的大型の商業店舗を賃借して開店。 カフェの目的は地域の交流拠点となること。現在年間延べ数で 300 団体 1 万人が利用。利用目的では、あらゆるジャンルの音楽ライブ、パーティー、講演会、映画会、謝恩会、新年会、送別会、ワークショップなどとなっている。また利用団体別では、近隣の保育園・幼稚園・学校、地域企業、趣味の団体、スポーツ少年団、音楽教室など。今後は地域文化交流のための、講演会、映画会、講習会、演芸などを増やしていく。

スペースナナ

【青葉区】



運営	NPO 法人スペースナナ
所在地	青葉区あざみ野 1-21-11 (田園都市線・横浜市営地下鉄あざみ野駅徒歩 6 分)
開設	2010 年 12 月
営業日	月曜・火曜定休 (土・日・祝日も営業) 11:00 ~ 18:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 0 名、ボランティア約 20 名
地域連携	商店会、市民活動団体、男女共同参画センターなど
まちの事務局機能	「地域でゆるやかにさえあう場をつくろう」をコンセプトに、社会的課題を共に考え、解決していけるようなコミュニティづくりをめざして、関心のある個人、団体などと連携をすすめている。
特徴	世代を超え、性別、国籍、障がいのあるなしに関わらず、多様な人々が出会い、つながりを持ち、元気になれる場所やゆるやかに支え合う仕組みをつくろうと、集った市民が開設。カフェの他に、ギャラリーやフェアトレードショップ機能を持ち、独自企画や市民の持ち込み企画を実施。ジェンダー、はたらく、教育、福祉、市民活動、セクシュアリティなどに関わる書籍の編集・出版を行う有限会社が事務所を置いている。

ハートフル・ポート

【旭区】



運営	個人（五味真紀）
所在地	旭区南希望が丘 58（相鉄線希望が丘駅徒歩 10 分）
開設	2014 年 6 月
営業日	月・火・木・金 10:00～17:00
スタッフ	オーナー 1 名、非常勤 3 名、有償ボランティア 1 名、ボランティア 15～20 名（みなと食堂、みなとの茶店）
地域連携	南希望が丘地域ケアプラザ（認知症カフェ「みなとの茶店」の運営）／NPO 法人活動ホームふたまたがわシュガーボット／地域で音楽活動をしている音楽家で作る実行委員会・商店街とのコラボで、「音楽で街を元気にするプロジェクト」がスタート／地域活動に興味のある人達が集まる場として、緩やかな連携が始まっている。
まちの事務局機能	地域で高齢者の生活支援を行う「ちょこっと応援団」の事務局をオーナーが担う。活動の一環として定期的に利用してもらっている。地域で活動する他団体・人同士をつなげる働き。認知症の方の見守り・声掛け。
特徴	住宅街の 2 世帯住宅一軒家の一部を改装し、住み開きとしてカフェを運営。店主が培ってきた地域のネットワークをベースに、地域住民が口コミで利用を広げており、居場所的機能も有している。飲食提供・作業所製品等の物販の他、市民活動や地域情報のチラシ等の配布、テーマを決めたおしゃべり会や音楽コンサート開催など、住民が参加して楽しむだけではなく、地域の中にある人材を活かして、住民自らが活躍できる場、文化的な発信ができる場にもなっている。「家」という環境で、多世代近居型の交流・学びの場づくりを大切にしている。みなと食堂（子ども食堂）、みなとの茶店（認知症カフェ）も開催。

地域交流拠点ひまわり

【旭区】



運営	認定 NPO 法人 若葉台
所在地	旭区若葉台 3-5-1（若葉台団地ショッピングセンター内）
開設	2010 年 10 月
営業日	月～金 10:00～18:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 2 名、ボランティア約 20 名
地域連携	住宅管理組合協議会や連合自治会、県公社、まちづくりセンター、学校等
まちの事務局機能	地域多世代交流拠点、高齢者等買い物サービス事業、住民主体の生活支援、見守り
特徴	高齢化が進む団地の中で、地区社協が中心になり、高齢・障害・子育てと、特別な支援を必要とする人向けの福祉事業を検討、事業主体として NPO 法人を設立した。「ふれあいわかば」は、安否確認と交流を目的に横浜市高齢在宅支援課事業として開設。「日本茶と笑顔のおもてなしと傾聴」をキャッチフレーズに、お茶を無料提供。地区ボランティアセンターとして「ニーズとボランティアのマッチング」「気軽な相談」「交流」3つの機能の他、高齢者等買い物支援サービス事業、生活支援の窓口にもなっている。

ほっとさこんやま

【旭区】



運営	NPO 法人オールさこんやま
所在地	旭区左近山 1-31-101 (左近山団地左近山 ショッピングセンター内)
開設	2014 年 4 月
営業日	月～土 9:00～18:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 9 名、ボランティア 10 名
地域連携	住宅管理組合、連合自治会、地区社会福祉協議会、商店会、老人会、医療法人、ケアプラザ、都市再生機構、行政
まちの事務局機能	地区社協の生活支援「社協ケアシステム」加入受付窓口
特徴	高齢化率 40%の大規模団地内の商店街空き店舗に開設された地域福祉交流拠点。運営する NPO 法人は、左近山連合自治会を中心に、社協、民生委員、老人会、住宅管理組合、ケアプラザ、医療法人、商店会が集まって立ち上げた。高齢者、子育て世帯などの多世代交流、地域全体が支えあえるつながりづくりを目指す。高齢者が引きこもらずに元気に過ごせる場所として、安価で飲食を提供している。現在小学生対象の日曜ほっと(昔遊び)、小中学生への学習支援の実施また高齢者の移動支援を検討中

反町駅前ふれあいサロン

【神奈川区】



運営	反町駅前ふれあいサロン運営委員会
所在地	東急東横線反町駅前 改札口から徒歩 0 分
開設	2010 年 4 月 13 日
営業日	月曜日から金曜日 10:30～17:30 会議室利用は 18:00～21:00 土日も可能
スタッフ	神奈川県障害者地域作業所連絡会から、スタッフ 1 名メンバーさん数名 3 時には帰る。 ステーションボランティア午前 1 人午後 2 人
地域連携	運営委員会に町内会・自治会 商店街が加わっている。東横フラワー緑道運営管理委員会や、フェスタ実行委員会など連携
まちの事務局機能	運営委員会に区役所区社協も一緒になり多様な活動を繋げる拠点として運営
特徴	障害のあるメンバーさんが運営に関わっている。彼らの居場所にもなっている。作業書のスタッフに加えステーションのボランティアと一緒に運営しているのが大きな特徴。駅前なので利用者の利用の仕方も多様

さくら茶屋にししば

【金沢区】



運営	NPO法人さくら茶屋にししば
所在地	金沢区西柴 3-17-6 (京浜急行金沢文庫駅徒歩 15 分)
開設	2010 年 5 月
営業日	さくら茶屋 (日曜のみ休日) 11:00 ~ 17:00 カフェ (土日祝日休業) 10:00 ~ 17:30
スタッフ	常勤 0 名、非常勤・事務局 8 名、(有償) ボランティア 80 名 (時間当たり 50 円)
地域連携	西柴商店街、金沢区役所活動センター & 湘南八景ほっこり (つながり STA) 認知症カフェ問題で、自治会役員・地域ケアセンター・社協・民生委員など
まちの事務局機能	特に無し

特徴

少子高齢化が進む西柴団地で「西柴団地を愛する会」を発足させ、商店街の空き店舗を活用して地域住民が世代を超えて交流できる拠点作りを、まち普請事業に応募して開設。一年半後に運営組織をNPO法人とした。事業内容は開店前に団地住民に行ったアンケート内容に応える形で展開し、コミュニティカフェ、朝塾、介護サロン 買物支援、西柴夜話、支え合いサロン、レンタルボックス、子どもイベント、健康維持活動などを行う。3年後には並びの空き店舗に2か所目の拠点、さくらカフェを開店した。2016年さくら食堂月2回開催、2017年10月から生活支援サービス補助事業を開始。

ほっこり

【金沢区】



運営	湘南八景自治会
所在地	金沢区東朝比奈 2-2-32 (京急線六浦駅徒歩 18 分、又は金沢八景駅から京急バス 15 分)
開設	2012 年 6 月
営業日	火、水、木、金、土 10:00 ~ 15:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 18 名
地域連携	地域ケアプラザ、さくら茶屋、区役所、社会福祉協議会
まちの事務局機能	特になし

特徴

地域の高齢化の進展に伴い、住民同士による助け合いシステムの必要性と阪神淡路大震災を機に独居高齢者等の見守りの必要性から、2度の住民アンケートを経て、自治会内の助け合いと見守りの仕組みと住民交流の場のニーズが見えた。自治会が、マンション 1F の店舗を購入し、まち普請制度を活用してカフェを開店。ボランティア組織「お助けマン」の事務局機能も果たしている。店舗内に乳幼児親子のスペースを設置し、多様な世代が集う場となっている。2013年～2016年は、金沢区民活動支援センターランチ「つながりステーション」として、さくら茶屋、区役所と連携して、生涯学習に関する情報提供、相談などを実施。

UDCN 並木ラボ

【金沢区】



運営	横浜市立大学
所在地	金沢区並木 1-17 (京急線富岡駅徒歩 14 分、シーサイドライン並木北駅徒歩 7 分)
開設	2014 年 3 月
営業日	不定期 (原則、平日・土曜日 10:00 ~ 20:00 をコマ割で open)
スタッフ	駐留担当教職員 4 名、駐留担当学生約 15 名、駐留地元スタッフ 2 ~ 3 名
地域連携	連携・協力団体：地元地縁組織、地元 NPO、名店会、各種地区施設、区役所、市役所、UR、住宅供給公社等
まちの事務局機能	地域連携を意識しながら、各団体や、活動をつなげる場づくり。
特徴	<p>地域再生・活性化の核となる大学を支援する文科省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」で、横浜市立大学が「環境未来都市構想推進を目的とした地域人材開発・拠点づくり事業」として、学生と地域をつなぐまちづくり拠点として開設。超高齢化社会への対応など全国に先駆けたモデルとなるまちづくりを研究実践する。</p> <p>公開授業や健康講座、潜在的ニーズや課題の掘り起こしとそれに関する実践的調査研究の拠点として大学が活用するだけでなく、地域住民の持ち込み企画イベントやコミュニティカフェの社会実験運営、地元と共催での学生提案イベント企画なども実施。</p>

港南台タウンカフェ

【港南区】



運営	株式会社イータウン (まちづくりフォーラム港南、横浜港南台商店会との連携)
所在地	港南区港南台 4-17-22-2F (JR 港南台駅徒歩 2 分)
開設	2005 年 10 月
営業日	平日・土曜日 10:00 ~ 18:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 6 名、有償ボランティア 1 名、ボランティア約 10 名
地域連携	連携団体：株式会社と NPO と商店会の協働スタイル、他約 6 団体、協力団体：約 20 団体
まちの事務局機能	<p>・横浜港南台商店会事務局 (2005-) / キャンドルナイト in 港南台事務局 (2006-) / 港南区民活動支援センターランチ (2008-) / 港南台まちある隊事務局 / ふ〜のん編集委員会事務局 / 横浜市地域経済元気づくり事業 (2008-2009)</p>
特徴	<p>「cafe から始まるおもしろまちづくり」をテーマに、県産材を活用したカフェサロンで小箱ショップやブチ教室、地域交流イベント、地域情報誌ふ〜のんや地域情報サイト e-town の企画運営等を行う。学生や地域の主婦、小箱ショップオーナー、地元若手店主らが主体的に関われる仕掛けづくりの実践を行う。2008 年より港南区民活動支援センターランチとして、港南台地域元気フォーラムやキャンドルナイトなど地域連携相互支援を実践。</p>

大倉山おへそ

【港北区】



運営	大倉山おへそ
所在地	港北区大倉山 2-5-11 (東急東横線大倉山駅徒歩4分)
開設	2014年1月
営業日	平日・土曜日 10:00～16:00 (土日祝日は基本的には閉館)
スタッフ	常勤0名、非常勤0名、有償ボランティア15名、ボランティア約0名
地域連携	エルム通り商店会、街カフェ大倉山ミエル
まちの事務局機能	商店会や、地域情報に関する「情報拠点」として機能。様々な活動のチラシ設置や、FBでの情報発信などを実施。
特徴	ヨコハマ市民まち普請事業を活用し、地域住民と商店会、町内会が連携して開設したまちの拠点。商店会・大倉山地域のインフォメーションセンターであり、スペースレンタル運営、商店会イベントの企画運営としても機能している。「おへそ」は、大倉山のひとと縁(えん)をソーシャルで結ぶ、の頭文字。「地域商業自立促進事業」の採択を受け、グローバルプロジェクトと称し、特徴あるまちづくりを目指している。

街カフェ大倉山ミエル

【港北区】



運営	NPO法人街カフェ大倉山ミエル
所在地	港北区大倉山 7-3-3 (東急東横線大倉山駅徒歩17分・地下鉄新羽駅徒歩12分)
開設	2010年11月カフェ開設 2011年12月NPO法人化
営業日	ギャラリーカフェ・夢うさぎ内レンタルスペースを利用 現在、週5日営業しております。
スタッフ	常勤1名(カフェオーナー) 非常勤1名、有償ボランティア10名、ボランティア約10名
地域連携	エルム通り商店会、大倉山おへそ、NPO法人ハッピーマザーミュージック 熊野の森もろおかスタイル、区役所、社会福祉協議会
まちの事務局機能	地域連携を意識しながら、各団体や、活動をつなげる場づくりと情報発信 大倉山夢まちづくり実行委員会、東急東横線各駅停車の会などに参加、
特徴	2010年11月 横浜商建連携事業の大倉山はちみつプロジェクトのアンテナショップとして、「街カフェ大倉山ミエル」が商店会空き店舗に開店。カフェ、ボックスショップ、講座の3本立てで地域に開かれた、敷居の低い交流の場を作る。その後、「大倉山おへそ」がオープン。同時に、空き家を活用した、「まめどスペース結」の運営協力に伴い、カフェを「結」内に移転。2016年12月「結」内のカフェレンタルの中止に伴い、2016年からは、カフェを住み開きのサロン「ギャラリーカフェ・夢うさぎ」内に移転。週5回のカフェランチを始める。空き店舗⇒空き家(空きスペース)⇒住み開きのシェアカフェ、と移転と運営の実践を繰り返しながら、活発な市民活動がある地元の特性を生かして、地域情報の発信、新たな活動、連携を進めている。

いのちの木

【都筑区】



運営	NPO 法人五つのパン
所在地	都筑区仲町台 1-32-21 (横浜市営地下鉄仲町台駅徒歩 3 分)
開設	2011 年 12 月
営業日	月～金 10:30 ～ 17:00
スタッフ	常勤 1 名、非常勤 1 名、有償ボランティア 2 名、ボランティア約 2 名
地域連携	葛が谷地域ケアプラザ、仲町台地区センター、港北ニュータウン聖書バプテスト教会、行政書士、併設しているヘルパーステーションと共に、弱さや障がいを持つ方々の全人的な必要に応えるネットワークづくりを目指しています。
まちの事務局機能	仲町台地区センターと連携をして、仲町台を絵本づくりの街にする働きを推進中 (やさしい絵本で街づくり)
特徴	「多世代ものづくり交流カフェ」として、布小物・ミシン ワークショップ、編み物と本づくりのプログラムが行われている。編み物サークルの参加者の中から、プロとして独自ブランドの立ち上げや、障害者の仕事づくりにも取り組む。徒歩圏に地域活動支援センター「マローンおばさんの部屋」も運営しており、「いのちの木」は、一人ひとりの特性に合わせて、企業と連携した福祉的なプログラムを生み出している。また、「やさしい絵本で街づくり」をテーマに地区センターと連携をして絵本づくりを推進し高齢者の役割を見出すことや障がい者の仕事につなげている。

シェアリーカフェ

【都筑区】



運営	NPO 法人 I Love つづき
所在地	都筑区中川 1-4-107 (横浜市営地下鉄線中川駅徒歩 3 分ハウスクエア横浜内)
開設	2014 年 11 月
営業日	10:00 ～ 18:00 水曜定休
スタッフ	常勤 10 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 0 名、ボランティア約 0 名
地域連携	参加：中川ルネッサンスプロジェクト、中川の街の活性化のための意見交換会、都筑の文化夢スタジオ運営委員会他
まちの事務局機能	タウンセンター子育て地蔵まつり実行委員会事務局、中川駅前商業地区振興会広報担当
特徴	1999 年都筑区の生涯学習の勉強会から生まれ、2003 年に NPO 法人化。地域まちづくりのキャリアを持つ NPO「I Love つづき」が、「地域の活動を発展させるために、心地よくシェアできる空間を提供する」をテーマに、住宅展示場とコラボして開設。地場産野菜や調味料等にもこだわったメニューを提供。アルコールも出している。コピー機やプリンター、リソグラフ等もあり、シェア・オフィス、コワーキングスペースの機能も提供。福祉作業所で作られたものを数多く取り扱う「横濱良品館」の商品展示販売も行っている。2017 年よりシェアするアトリエ、シェアアトリエを開設。

コミュニティ&シェアスペース KOTOBUKI 【鶴見区】



運営	神道映利
所在地	鶴見区潮田町 2-98 (JR 鶴見駅/京急鶴見駅より徒歩 13 分)
開設	2016 年 11 月
営業日	月曜～日曜 9:00～22:00 (予約状況による)
スタッフ	常勤 1 名、ボランティア 2 名
地域連携	現在なし
まちの事務局機能	現在なし
特徴	「リソース(趣味、技能、経験)を誰かのために役立てよう」をコンセプトに、自分の価値、存在意義の確認、社会貢献の第一歩を実現する場。1 階はキッチン&カフェスペース(最大 20 席)。2 階は 1 2 畳のフローリングスペース。共に貸出可。ここで開く講座や交流会を通じて JOY ある暮らしを提供する。いずれ人材バンクのような会員化を図り、困っている人の“困った”を解消できる人とのマッチングで助け合いの輪をつくっていきたくと考えている。

こまちカフェ 【戸塚区】



運営	NPO 法人こまちぷらす
所在地	戸塚区戸塚町 145-6 奈良ビル 2F (JR・横浜市営地下鉄戸塚駅西口徒歩 7 分)
開設	2014 年 5 月(現店舗。初めての開店は 2012 年 3 月) 2013 年 4 月法人化
営業日	平日・土曜 10:00～17:00 (定休日:日曜・祝日、第 3 月曜日)
スタッフ	常勤 3 名、非常勤 20 名、有償ボランティア 11 名、パートナー約 100 名
地域連携	NPO 法人子育てネットワークゆめ、とつか宿駅前商店会、戸塚宿ほのぼの商和会、戸塚東口商店会、戸塚区役所、横浜市役所、子育て応援隊、ケアプラザ、区民活動センター、区社協、男女共同参画センター、戸塚認知症キャラバン・メイト、自治会、横浜市内外企業等
まちの事務局機能	多様なテーマのイベント(産前産後、学び、コミュニティ、障がい、ものづくり等)を通して、今まで交差しなかった人同士や団体同士をつなげる機能。商店会事務局も務めている。フューチャーセッションの開催や地域のコーディネーター育成事業にも取り組んでいる。また、官民住民で出産祝いをつくりその過程で地域の母親たちが抱える“孤”育ての課題を共有し、日常の中で支える仕組みを考えるプロジェクト(ウェルカムベビープロジェクト)の事務局をつとめるなど、まちづくりへの提言も行っている。
特徴	ふらっと寄れるというカフェの機能とそこから担い手を発掘育成するという機能をワンストップでもつカフェ。コーディネーターがお客様に伴走し参画できる機会をコーディネートしていることが特徴。2014 年横浜市まち普請事業の活用で現在の店舗を開店。食事や喫茶の提供、手づくり雑貨の小箱ショップ、会議室、レンタルキッチン等も有する。

コミュニティカフェ夢みん

【戸塚区】



運営	NPO 法人 いこいの家 夢みん
所在地	戸塚区俣野町 1404-6 (JR 大船駅・JR 横浜市営地下鉄戸塚駅から徒歩 5 分)
開設	1996 年 4 月
営業日	月曜～土曜 10:00～16:00 日曜 (月 1 回)
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 7 名、有償ボランティア 20 名、ボランティア約 50 名
地域連携	自治会、深谷台地域運営協議会、福祉連絡会、介護福祉関係機関、区役所、区社協、地域ケアプラザ、小学校、俣野公園プレイパーク、地域作業所
まちの事務局機能	地域運営協議会の中で事務局担当
特徴	「人と人がつながり誰もが生き生きと過ごせる居場所を地域の皆さんとともに創っていく」という法人理念のもと、多世代交流サロンを運営。交流、趣味、健康、学びなどの曜日別介護予防プログラムを柱に、子ども将棋やおもちゃ広場など子供向けプログラム、ゆめサロンや介護者のつどい、地域向け講座などの認知症対策にも取り組んでいる。28 年度からは住民同士の助け合い活動「ボランティアバンク・えん」29 年度からは食事サービス「ドリーム地域食の会」と統合し、地域の高齢化による課題解決に向けて活動を広げている。担い手のほとんどが近隣地域の高齢者により運営されていて、自らの介護予防にもつながっている。

ふらっとステーション・とつか

【戸塚区】



運営	NPO 法人 くみんネットワークとつか
所在地	戸塚区吉田町 104-1 (JR・横浜市営地下鉄戸塚駅徒歩 3 分)
開設	2014 年 3 月
営業日	木曜定休 (土・日・祝日も営業) 10:00～17:00
スタッフ	常勤 0 名、非常勤 0 名、有償ボランティア 40 名、ボランティア約 40 名
地域連携	NPO・NGO 活動団体、地域活動団体、街の商店、近隣町内会、地域公的機関、大学ボランティアセンター、とつか区民活動センター、市内企業など
まちの事務局機能	地域の人、団体、活動などをつなげるまちの応援団としての機能 市民活動、地域活動、生涯学習活動、ボランティア活動などのコーディネート機能。 地域課題解決型としての子育て応援、シニア応援機能。
特徴	ふらっと自由に立寄り、子ども、学生、子育て中のママ、おとな、お年寄り、在学・在勤の方など、地域に関わる様々な人が集い、出会いがある『みんなの居場所』というコンセプトで、分譲マンション 1F に開設された地域の活動拠点。市有地売却にあたり行われた「公民連携による課題解決型公募モデル事業」で、三菱地所レジデンス(株)の地域交流拠点を有する集合住宅プランが採択された。拠点は地元 NPO「くみんネットワークとつか」が担い、多数のボランティア協力により運営がなされている。

ふらっとステーション・ドリーム

【戸塚区】



運営	NPO 法人 ふらっとステーション・ドリーム
所在地	戸塚区深谷町 1411-5 (JR 大船駅・JR 戸塚駅からバス約 25 分、小田急・市営地下鉄湘南台駅バス停より徒歩 3 分)
開設	2005 年 12 月
営業日	平日・土曜 10:00～17:00 日曜 12:00～17:00 祭日休み
スタッフ	有償ボランティア約 40 名
地域連携	深谷台地域運営協議会
まちの事務局機能	
特徴	地域で誰もが生き生きと心豊かに過ごしていくことを実現するための皆の交流の場・居場所 サロン・マイショップ、情報・相談コーナー、見守り活動、各種イベント、講座、食を中心としたサロンがメイン活動。年間 15,000 名を超える利用者が賑わっている。 子育て中の親子に夕食（毎週火曜）を提供。総合事業サービス B 通所型支援を実施

ハッピースクエア

【保土ヶ谷区】



運営	NPO 法人 リロード
所在地	保土ヶ谷区天王町 1-30-17 (相鉄線天王町駅徒歩 7 分)
開設	2007 年 10 月
営業日	営業日：火曜日～土曜日 12:00～19:00 (日曜日・国民の祝日・年末年始は休業)
スタッフ	常勤 1 名、非常勤 2 名、有償ボランティア 0 名、ボランティア 約 7 名
地域連携	保土ヶ谷区青少年指導員 民生児童委員 地域子育て拠点 地域サークル 保土ヶ谷区社会福祉協議会 NPO 法人きてん 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団 (岩間市民プラザ) など
まちの事務局機能	特になし
特徴	地域の中高生の居場所機能が中心で、地域の子育て中のママ+乳幼児～高齢者施設の利用者+スタッフと幅の広い地域の方の寄り場ともなっていて、「共に過ごし、友に学ぶ場/地域で中高生が育つ場」となるコーディネートを行なっている。行政の補助事業であるが、登録制は採らず、地域の居場所の中で中高生が育つ形を目指している。また、居場所で付き合いの生まれた中高生たちの、地域での出番を創出し、活動していくことにも取り組んでいる。

コミュニティサロンおさん

【南区】



運営	社会福祉法人たすけあいゆい
所在地	南区南吉田町2-17
開設	2012年5月
営業日	月～金 10:00～20:00 (12月1日～3月末まで冬時間営業 10:00～19:30)
スタッフ	常勤1名、非常勤4名、有償ボランティア約22名、ボランティア約2名
地域連携	近隣小学校「まちの人たちを笑顔にするお茶出し作戦」「サンサンコンサート」 アフタースクール・キッズクラブ等放課後支援団体、近隣社会福祉施設：4団体
まちの事務局機能	特になし
特徴	商店街の一角にある空き店舗を活用したコミュニティカフェ機能として、地元団体との懇談会から浮かび上がったニーズである、高齢者や障害者を問わない居場所機能、とくに子どもの居場所になるようにとの願いを受け、徐々に事業内容を広げている。横浜市と連携し、家庭環境等に何らかの困難を抱える子どもを主な対象とした居場所づくりについて「社会的インパクト評価モデル事業」を2016年10月末から開始し、夕食の提供、学習支援の提供を行っている。

はまどま

【南区】



運営	NPO法人よこはま里山研究所 (NORA)
所在地	南区宿町2-40 大和ビル119 (京急線南太田駅徒歩7分・市営地下鉄蒔田駅徒歩7分)
開設	2008年6月
営業日	不定期 (開催イベントに準じる)
スタッフ	有償ボランティア0名、ボランティア8名
地域連携	宮宿花一・二丁目町内会、蒔田公園愛護会、まいたエコサロンの会、フォーラム南太田、大岡川アートプロジェクト実行委員会、伊勢佐木町商店街エコ商店街委員会、タウンニュース南区編集室、そのほか市民活動団体など
まちの事務局機能	地元町内会の一員として、地域活動の広報やイベント等の企画・調整をお手伝いしている。一方で市内の環境系市民団体の中間支援、各種相談・コンサルティング等もおこなっている
特徴	法人事務所として借用していたスペースを、「街なかの里山の入口」として地域や社会に開き、人と里山をつなぐ居場所「はまどま」(横浜の土間の意味)として2～3日に1回の頻度で各種イベントを開催している。神奈川野菜の食事会や野菜市、発酵食や保全食づくり、竹細工などの手仕事、食事付きの映画上映会やサロンなどのほか、適宜、会員提案型の企画を実施。里山の恵みを分かち合い、この場に集う人びとの経験や技をいかした場づくりをおこなっている。「はまどま」は、ムラの寄り合い処・作業場という位置づけで、ここからヤマやノラに出かけて「里山とかかわる暮らしを」実践しようと都市的な里山暮らしを提案している。

カフェらいさー

【南区】



運営	合同会社カフェらいさー
所在地	南区日枝町 4-97-2
開設	2013年10月
営業日	火、木、金、土 11:00～19:00
スタッフ	常勤0名、非常勤1名、有償ボランティア0名、ボランティア約1名
地域連携	横浜市男女共同参画センター、国際交流協会、小学校
まちの事務局機能	特になし
特徴	食品添加物やアレルギーに配慮した食材を使用しています。 地域主催のイベントへの出店、近隣小学校の授業協力、地域カフェ等への商品提供。 カフェや飲食店の起業を目指す方からの相談受付や、練習の場として厨房の使用、スキル習得に必要と思われる講師等の紹介。

参考

本事業の中間報告書

2015 年度



2015 年度カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及事業の中間報告書

発行：2016 年 3 月
体裁：A4 判中綴じ製本
ページ数：44 ページ

2016 年度



2016 年度カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及事業の中間報告書

発行：2017 年 2 月
体裁：A4 判中綴じ製本
ページ数：48 ページ

中間報告書は以下の web サイトにて pdf ファイルでご覧いただけます。

<https://yokohama-ccn.jimdo.com/>





report

カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及
横浜市市民活動支援センター自主事業報告書

発行者：横浜コミュニティカフェネットワーク
横浜市港南区港南台 4-17-22-2F 港南台タウンカフェ内
TEL：045-832-3855 FAX：045-832-3864

発行：2018年3月